

改訂版

—みんなで家庭教育を支える—

おや がく

あおもり親楽プログラム

支援者編

3



青森県教育委員会

あおもり親楽プログラムの作成にあたって

家庭は、子どもたちの健やかな育ちの基盤であり、家庭教育は、すべての教育の出発点です。しかしながら、近年、少子化や核家族化、地縁的なつながりの希薄化等により、子育てや家庭教育を支える環境は大きく変化しています。親が祖父母などから子育てを学ぶ機会が減るとともに、地域の支えも弱まるなど、家庭教育を行うことが困難な社会になっているという指摘があります。

このようななかで、充実した家庭教育が行われていくためには、個々の家庭だけではなく、行政や学校、支援団体、企業、地域住民など子育てに関わるさまざまな主体が協力し、ひとりひとりの親が子どもの良さや個性に気づき、子どもの発達段階に応じた適切な関わりができるように「親の学びと育ち」を支えていくことが課題となっています。

そこで、県教育委員会では、親同士の話し合いを通じて主体的に学び合う学習プログラム「あおもり親楽プログラム」を、平成24年度から対象別（乳幼児・小学生編、中・高校生編、支援者編、特別編、特別編2）に作成し、令和2年度は、乳幼児・小学生編の改訂版を、令和3年度は、中・高校生編の改訂版を新しいプログラムを追加し、発行しました。

今年度は、平成26年度に作成した「あおもり親楽プログラム3～支援者編～」について、社会状況の変化に伴う家庭教育の今日的課題に対応するため、内容を改訂することとしました。改訂にあたっては、本県の家庭教育を取り巻く現状と課題を踏まえ、今後の家庭教育支援の在り方や、家庭教育支援者に求められることなどについて、内容を修正したほか、家庭教育を支援する方々がより活用しやすいプログラムになるよう工夫しております。

このプログラムを家庭教育支援に関連する研修や講座、保育所・幼稚園・学校等での保護者会やPTA研修会など、さまざまな機会に御活用いただくことで、支援者同士のつながりが深まり、家庭教育支援の一層の充実につながることを期待します。

結びに、本プログラムの作成に御尽力をいただいた青森県家庭教育支援推進協議会委員の皆様にご心より感謝申し上げます。

令和5年3月

青森県教育庁

生涯学習課長 渡部 泰雄

も く じ

あおもり親楽プログラムの作成にあたって	1
1 あおもり親楽プログラムについて	3
(1) あおもり親楽プログラムとは	
(2) 改訂版あおもり親楽プログラム3（支援者編）の構成と内容	
2 本県の家庭教育を取り巻く現状と課題	5
(1) 子育ての悩みや不安の現状	
(2) 家庭教育（子育て）支援の現状	
(3) 家庭と地域の教育力	
(4) 県教育委員会における家庭教育支援の取組（令和5年3月現在）	
3 今後の家庭教育支援の在り方	15
(1) 相談体制の整備と周知	
(2) 新しい家庭教育支援の普及啓発・学習機会の方向性	
(3) 家庭教育支援活動に携わる人材の育成・確保	
4 家庭教育支援者に求められること	19
(1) 支援者として心得ておきたいこと	
(2) 支援にあたって気をつけたいこと	
(3) 支援者としての力量形成に努める	
5 家族としてできること	25
(1) 家族だから関わり過ぎてしまうこと	
(2) 祖父母・家族に求められる親への支援	
6 あおもり親楽プログラムの活用方法	29
(1) あおもり親楽プログラムの流れ	
(2) あおもり親楽プログラムの進め方	
(3) あおもり親楽プログラムの使い方	
7 プログラムの実際	33
I 支援者を対象としたプログラム	
I-1 誰のための講座だろう？ ～参加者が主体的に話し合うためには～	
I-2 聴くことの大切さ ～相手の心に寄り添って～	
I-3 地域でつながるために ～きっかけを大切に～	
II 祖父母・家族を対象としたプログラム	
II-1 子育ての主役は誰？ ～祖父母・家族の役割を考える～	
II-2 親の親だからこそ① ～祖父母だからできること～	
II-3 親の親だからこそ② ～祖父母だからできること～	
8 共通資料	47
◆アイスブレイクのいろいろ・手法のいろいろ・プログラムシート・アンケート	
◆第2章に関連する参考資料	

本書で使う用語 ・親楽プログラム…親同士が学び、気持ちが楽になり、子育てが楽しくなる学習プログラムの意。
・親…家庭において子に教育を行う者、保護者を含む。

1 あおもり親楽プログラムについて

あおもり親楽プログラムについて

(1) あおもり親楽プログラムとは

子どもを取り巻く社会環境の変化から、世代間の子育ての支援や家庭教育を学ぶ機会が減少しており、親が親として育ち、その役割を果たせるような学びが必要となっています。あおもり親楽プログラムは、子どもの理解や親子の関わり方等、子育てに必要な知識やスキルについて、親同士が身近なエピソードや活動を通して話し合い、主体的に学ぶ「参加型の学習プログラム」です。自分自身の課題に気づいたり、親や支援者としての役割を考えたりすることができ、楽しい子育ての実践・支援につながります。これまで、対象別に「乳幼児・小学生編」、「中・高校生編」、「支援者編」、また、乳幼児の生活習慣に関する内容のプログラムを掲載した「特別編」2冊の計5冊を発行しています。「乳幼児・小学生編」および「中・高校生編」については、新しいプログラムを追加し、改訂版を発行しました。

(2) 改訂版あおもり親楽プログラム3（支援者編）の構成と内容

平成26年度に発行した「あおもり親楽プログラム3（支援者編）」は、ほかのあおもり親楽プログラムとは異なり、家庭教育を支援する方や祖父母や家族など、または家庭教育支援者を指す方を対象に作成したプログラムです。

この度発行する改訂版の本編第2～5章は、本県の家庭教育を取り巻く現状と課題や、今後の家庭教育支援の在り方、家庭教育支援者に求められることなどをまとめました。また第6～7章は、支援者が支援するにあたり、気をつけなくてはならないことなどをエピソードや活動を通して話し合い、参加者が主体的に学ぶ「参加型プログラム」を掲載しております。



2 本県の家庭教育を取り巻く現状と課題

本県の家庭教育を取り巻く現状と課題

家庭教育は、すべての教育の出発点であり、家庭は、子どもたちの健やかな育ちの基盤となる場です。しかしながら、核家族化や共働き世帯、ひとり親世帯の増加に伴い、家庭や家族も変容し多様化するなか、親が身近な人から子育てを学ぶ機会が少なくなっています。また、相談や協力できる人が周りにいないなど、親だけで子育てを担わなくてはならない状況が多く見られ、家庭教育を行うことが困難な社会になっているという指摘があります。

このような状況を踏まえ、第15期青森県生涯学習審議会答申（令和4年10月）の第2章「地域全体で子どもを育む家庭教育支援の在り方について」では、『家庭教育の充実のための実態等把握調査』（青森県教育委員会）*1および『青森県親子等生活実態調査』（青森県）*2で得られた調査結果をもとに、「子育ての悩みや不安の現状」「家庭教育（子育て）支援の現状」「家庭と地域の教育力」について説明しています。

この章では、本県の家庭教育を取り巻く現状と課題を把握するため、第15期青森県生涯学習審議会答申を参考に、本県の家庭教育に係る状況を説明するほか、県教育委員会における家庭教育支援の取組を紹介します。なお、参考資料は、P53～62に掲載しています。

- *1 『家庭教育の充実のための実態等把握調査報告書』（青森県教育委員会 令和3年3月）：県内在住の小学校5年生および中学校2年生の保護者を対象に家庭教育に関する意識や支援の状況等の把握を目的に実施した。
- *2 『青森県親子等生活実態調査結果報告書（令和元年11月1日現在）』（青森県 令和2年7月）：母子世帯・父子世帯・養育者世帯（児童扶養手当受給者）および寡婦世帯を対象に県内におけるひとり親家庭の生活実態および福祉ニーズの把握を目的に実施した。

（1）子育ての悩みや不安の現状

ア 悩みや不安の内容

主に子育てに関わっている人は、平日、休日ともに女性が主体となる割合が約9割となっている状況のなか、女性の4割以上が悩みや不安があると回答しています。（参考資料：図表1～3）また、家族形態別に比較すると、ひとり親家族は、半数近くが「悩みや不安がある」と回答しています。（参考資料：図表4）

悩みや不安の内容（参考資料：図表5）については、「子どもの勉強や進学のこと」の割合が高くなっています。これは、子どもの生活全体を考えたときに、勉強は大きな割合を占めており、保護者が子どもの勉強や進学に向けて、悩みつつ協力や手助けをしている状況があることによるものと考えられます。このほかにも、子どもの「教育費」「しつけやマナー」「健康や発達」の割合が高くなっています。また、県総合社会教育センターで実施している



電話相談では、子どもの発育や発達に関わる相談が増えています。

イ 悩みや不安の相談相手

悩みや不安の相談相手（参考資料：図表7）としては、核家族・拡大家族（親と、結婚した子どもの家族などが同居する家族形態）では配偶者がもっとも多くなっており、悩みや不安がある場合、身近な相手に打ち明けたり相談したりする傾向が高くなっています。一方、ひとり親家族では、「子どもと話し合う」「相談しない」の割合が高くなっており、相談相手が限られている、行政等による相談窓口を知らない、そもそも相談相手を求めているとといった状況もあると考えられます。

(2) 家庭教育（子育て）支援の現状

ア 希望する家庭教育（子育て）支援

受けてみたい支援（参考資料：図表9）として、「子どもが安全安心に過ごせる場所」がもっとも多くなっています。児童館・児童センターをはじめ、放課後児童クラブや放課後子ども教室の取り組みもなされているものの、子どもが被害者となる交通事故や犯罪への強い不安感をもっていること、また新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、学校が休校となり、休校期間中の対応が保護者に求められたことも、その背景にあると考えられます。



二番目に多かった回答は、「子どもの家庭での学習習慣を身に付けさせる場や機会」となっています。「基礎学力の向上」や「脱・ゆとり教育」が社会の潮流となり、学校からの課題等、家庭で取り組む学習の量が増えている一方で、細やかに対応できない保護者の事情が反映していることや地域活動による学習支援などへの期待があると考えられます。

一方、24.1%の人が「特にない」と回答しています。自由記述では、「各家庭の状況があるのですべてのニーズに対応できないと思う」「自分で解決していくしかない」といった意見が散見され、「あきらめ」に近い状況も読み取れます。

イ 講座・研修会への参加について

講座・研修会への参加状況（参考資料：図表10）については、「参加したことがない」と「あまり参加しない」を合わせた回答が、全体の9割以上となっています。講座・研修会などに参加しやすくするために重要なこと（参考資料：図表11）として、男女ともに「興味のある内容だと良い」がもっとも多く、次いで「身近な場所で開催されると良い」、「インターネットやSNSなどで提供されると良い」が多くなっていますが、「要件が整っても参加しない」と回答した人が14.9%見られ、家庭教育（子育て）支援の取組のむずかしさがうかがえ

ます。

ウ 家庭教育（子育て）について知りたい情報

家庭教育（子育て）について保護者が知りたい情報（参考資料：図表12）については、「子どものほめ方・叱り方」がもっとも多く、次いで、「子どもの心の健康・発達」、「子どもの携帯電話やインターネットの利用に関すること」が多くなっています。

知りたい情報の希望する入手先を含め、情報の入手先（参考資料：図表13・14）については、「友人」「インターネット・SNS」への回答が一定数あり、今後は、対面式の講座や研修会にとらわれない、新しい情報発信、学習方法の開発が求められると考えられます。また、身近な存在である「学校」との回答も一定数見られ、学校と協働で子どもの育ちと親の育児を支援していく方策についても検討していく必要があります。



（3）家庭と地域の教育力

ア 子どもを育てる上での親の学び

保護者の学習に特に大切だと思う内容（参考資料：図表15）では、「子どもの自立心の育て方」「基本的生活習慣の定着」が上位に挙げられています。また、「学習の必要はない」への回答は、極めて低くなっています。このことから、保護者自身も日常生活における家庭教育の重要性を認識しており、知識や方法についての学習や情報提供の機会を求めていると考えられます。

イ 保護者が家庭・学校・地域に期待する教育機能（参考資料：図表16）

家庭で身につけさせるほうが良い教育としては、「基本的生活習慣」が97.0%でもっとも多く、次いで、「生活体験」が76.9%となっています。学校で身につけさせるほうが良い教育としては、「人間関係づくり」が82.0%でもっとも多く、次いで、「性教育」が72.0%となっています。地域で身につけさせるほうが良い教育としては、「自然体験」が24.8%でもっとも多く、次いで、「職業観」が23.4%となっています。

この結果から、保護者が考える家庭・学校が担う教育機能として、家族の愛情のもとで愛着形成や自立心、基本的生活習慣を家族が中心となって育み、集団での学びや専門的知識を必要とするものを学校で担うことを期待していると考えられます。また、生活圏内で展開される地域の子ども会や町内会の活動に触れる機会がとぼしくなったため、地域社会の教育機能を実感する機会が少なくなってきたのが読み取れます。

(4) 県教育委員会における家庭教育支援の取組（令和5年3月現在）

ア 家庭教育学習テキスト「あおり親楽プログラム」の作成・周知（生涯学習課事業）

「あおり親楽プログラム」は、子どもの理解や親子の関わり方等、子育てに必要なスキルについて、身近なエピソードやワークを通して参加者同士が話し合い、主体的に学ぶ「参加型の学習プログラム」です。自分自身の課題に気づいたり、親や支援者としての役割を考えたりすることができ、楽しい子育ての実践・支援につながります。

これまで、対象別に「乳幼児・小学生編」、「中・高校生編」、「支援者編」、また、乳幼児期の生活習慣に関する内容のプログラムを掲載した「特別編」2冊の、計5冊を発行しています。

「乳幼児・小学生編」および「中・高校生編」については、子どもが健やかに育ち、社会で自立していくために家庭教育で大切にしたいこととして、県教育委員会が提唱した「あおり家庭教育10か条」（P12～13参照）を素材にプログラムを作成しています。また、新しいプログラムを追加し、改訂版を発行しました。

乳幼児検診や保育所・幼稚園・こども園、学校、PTA等の講座・研修会のほか、企業等での研修にも御活用いただいています。また、「あおり親楽プログラム」の活用促進を図るためのリーフレットを作成し、関係各所へ配付しています。



イ 「あおもり家庭教育アドバイザー」の養成および派遣・スキルアップ講座（総合社会教育センター事業）

今日的な課題に対応した家庭教育の学習を推進するための「あおもり親楽プログラム」を活用した講座や研修会での進行役となる「あおもり家庭教育アドバイザー」を養成し、スキルアップを図るとともに、PTA等の要請に応じて派遣し、地域における家庭教育支援の活性化を図っています。



養成講座（R3）の様子

ウ あおもり家庭教育応援フェスタ（生涯学習課事業）

地域が一体となって子どもたちを育むことについて学びを深める講演会および様々な家庭教育支援に関する情報提供を通して、家庭教育についての理解と認識を深め、地域全体で家庭教育を支援する意義や必要性についての普及啓発を行うイベントを開催しています。



フェスタ（R3）の様子

エ 家庭を支える連携・協働セミナー・青森県家庭教育支援ネットワーク形成研修会（生涯学習課事業）

社会全体で家庭教育を支援するため、家庭教育支援に関わる人々が一堂に会し、家庭教育の今日的な課題等について学習するとともに、市町村および家庭教育支援者等のつながりを深めるための研修会を開催しています。



孫育て研修会（R3）の様子

カ 読み聞かせの大切さを伝える「親子ふれあい読書アドバイザー」の養成（生涯学習課事業）

幼稚園や小学校等で実施される読み聞かせ研修会等で講師を担当する「親子ふれあい読書アドバイザー」を養成するため、県内6地区で研修会を開催しています。

キ 家庭教育相談事業（総合社会教育センター事業）

子育て中の不安や悩みを軽減することを目的とし、乳幼児から高校生までの子をもつ保護者やその家族を対象に、電話・メール等により、寄り添い型の家庭教育相談を行っています。

- ・実施方法：電話相談・週3回 月・水・木曜日（祝日・年末年始を除く）13:00～15:00
メール相談・24時間受付
- ・場 所：総合社会教育センター電話相談室
- ・対応内容：発育・発達、しつけ、対人関係などの子どもに対する悩みや家庭教育全般について
- ・相談体制：家庭教育相談員が対応

電話による相談『すこやかほっとライン』 017-739-0101

ク 家庭教育支援動画制作普及事業（総合社会教育センター事業）

子育てに関わる人々の抱える不安や悩みの解消を目的とし、家庭教育の重要性を訴えるため、家庭教育支援動画を制作し、専門家等により学術的に裏付けされた子育て情報を普及させ、県内における家庭教育の充実を図っています。

家庭教育支援動画は、青森県総合社会教育センターホームページ内の「あおもり子育てネット」のサイトで視聴可能です。

青森県総合社会教育センター『あおもり子育てネット』

(<https://www.alis.pref.aomori.lg.jp/gakusyu/e-learning/kosodate-a/>)

あおもり子育てネットは家庭教育に関する電話・メール相談や学習情報を提供することで、青森県の子育てを応援します。

『あおもり子育てネット』は、こちらのQRコードからも御覧になれます。



◆あおもり家庭教育10か条

県教育委員会では、社会全体で家庭教育を応援していく取組を推進するため、子どもたちが夢をもち、社会と関わってたくましく育つよう、「家庭で取り組みたい、地域で応援したい」大切なことをまとめた「あおもり家庭教育10か条」を作成しました。

あおもり家庭教育10か条は、子どもが健やかに育つため家庭教育で大切にしたいことを呼びかけ、家庭教育の重要性について啓発を図るものです。最後の1か条は、各家庭で話し合っ取り組むことができるよう、「わが家の1か条を決めよう」としています。

あおもり家庭教育10か条のひとつひとつについて、設定した理由は以下のとおりです。支援者にとっての大事な10か条になると思います。

《あいさつの習慣をつけよう》

子どもも親も地域の一員として、地域や社会に関わっていくには、あいさつがとても重要です。また、社会的マナーとしてもあいさつはとても大切です。

《子どもの生活リズムをつくろう》

子ども達を取り巻く生活環境が変化し、基本的な生活習慣を確立させることが困難になってきています。子どものやる気と元気は規則正しい生活習慣を身につけることから始まります。「早寝早起き朝ごはん」を習慣づけることが大切です。

《家族の会話を大切にしよう》

子どもの自立心や自制心を育てることは将来の「自立」につながります。そのためには家族の会話が大切です。会話はコミュニケーションの基本です。話をよく聴き、思ったことを伝える。それが家族の絆を深めます。

《子どものいいところを伸ばそう》

子どもに愛を伝えること、それは子どもとの強い信頼感へつながります。子どもにとってほめられることは心の栄養になります。さらに、認められているという安心感が生まれ、自分を大切にできるようになります。

《家族の一員としての役割をもたせよう》

子どもの役割意識と責任感をはぐくむためには、家での手伝いなど家族として役割をもたせることが大切です。家族というチームのなかで、子どもの成長に応じたポジションを与えることで、責任感、自立心なども得られます。

《社会生活のルールを教えよう》

保護者の善悪の判断が、子どもの倫理観に大きく影響します。子どもに社会でのルールを身につけさせるためには、親が手本を示し、なぜその社会のルールがあるのかを子どもに教えることが大切です。

《感謝と思いやりの心をはぐくもう》

大人が率先して、感謝の言葉を伝えると子どもの思いやりの心も育ちます。感謝の言葉と言われることで、人にも感謝を伝えられるようになります。

《いろいろな体験をさせよう》

家庭以外での遊びや活動は、子どもが直接社会と関わる貴重な体験です。「気づき」や「学び」があり、ひとまわり大きく成長するきっかけになります。地域の行事にも積極的に参加させるなど様々な体験をたくさんすることで、豊かな心を育てることにつながります。

《うちの子もよその子もみんな育てよう》

子どもは、地域みんなで育てるという観点が重要です。うちの子にもよその子にも等しく接することが大切です。親同士が子育てのことを話し合うことも子どもの成長には必要なことです。

《わが家の1か条を決めよう》

子どもが大人になり、自分が親になった時、小さい時に自分の親が大切にしてきたことを振り返り、また自分の子育てに生かすことができます。わが家で大切にしたいことを家族みんなで話し合うことで家族の絆を確認できます。



あおもり家庭教育10か条
—子どもには愛を伝え、手本を示し、ほめて、叱って、見守って—

子育てで、まちはつながる、あつたまる。

できることからはじめよう
あおもり家庭教育10か条
—子どもには愛を伝え、手本を示し、ほめて、叱って、見守って—

あいせつの習慣をつけよう
子どもの生活リズムをつくろう
家族の会話を大切にしよう
家族の一員としての役割を持たせよう
社会生活のルールを教えよう
子どものいいところを伸ばそう
感謝と思いやりの心をはぐくもう
わが家の1か条を決めよう!
いろいろな体験をさせよう
うちの子もよその子もみんな育てよう

リンちゃん

家庭で、地域で、愛情メッセージを子どもに伝えよう。すると、自然に笑顔がふえてきて家庭が、地域が、よりハッピーになっていきます。

まずはできることから、ひとつずつ。そのための「あおもり家庭教育10か条」をみんなで話し合ってみませんか？

家庭での取組を家族で話し合ってください。できたら に色をぬりましょう。

発行 青森県教育庁生涯学習課 TEL 017-734-9890

つながりあい支えあい家庭教育応援事業
社会全体で子育ての応援するキャンペーン

青森県教育委員会・青森県

※あおもり家庭教育10か条リーフレットは、こちらからダウンロードできます。
<https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-shogai/10kajou.html>



3 今後の家庭教育支援の在り方

今後の家庭教育支援の在り方

第15期青森県生涯学習審議会答申では、本県の家庭教育に係る現状と課題を踏まえ、活動内容や多様な主体との連携、広報などで特色ある取組を行っている県内外の家庭教育支援団体について、令和3年度に行った実地調査をもとに、今後の家庭教育支援の在り方について提言しています。

この章では、本県での家庭教育支援に関する様々な取組がさらに効果的なものとなるよう、第15期青森県生涯学習審議会答申を参考に、「相談体制の整備と周知」「新しい家庭教育支援の普及啓発・学習機会の方向性」「家庭教育支援活動に携わる人材の育成・確保」について、支援者や家庭教育支援団体に関連する部分を説明します。

(1) 相談体制の整備と周知

ア 気軽に相談できる窓口

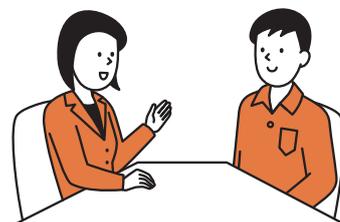
家庭教育（子育て）に関する相談窓口については、県内各地にすでに設置されていますが、相談することや支援を求めることは、それ相応のエネルギーを必要とすると考えられます。そのため、まずは垣根が低く、気軽に参加できる場を整備した上で、希望に応じて具体的・個別的な相談ができるようにして、段階的にニーズに応えられるような対応が求められています。

イ 専門機関へつなく相談体制

相談者の悩みが多岐にわたっている現状を踏まえると、相談業務には相談内容に応じて、さらに必要な支援が可能と思われる団体・機関を紹介することがより一層求められます。行政や専門機関などと連携して対応することは、相談者の安心感につながります。

ウ 相談窓口の周知

悩みや不安を抱えていても、相談相手が限られている、あるいは、誰に相談してよいかわからないといった状況も考えられることから、悩みや不安を抱える家庭に、地域で活動している団体や行政等による窓口に関する情報が届くよう、子育て中の家庭に向けた情報提供はもとより、研修会や講座等の機会やホームページ等を活用した周知活動に積極的に取り組む必要があります。



(2) 新しい家庭教育支援の普及啓発・学習機会の方向性

ア 親同士や地域とのつながりをつくる取組の推進

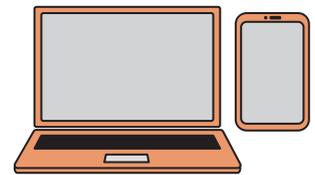
実地調査を行った団体では、楽しく、気軽に参加できるカフェ、サークル、おさがり交換会等の交流の場を提供しています。こうした交流の場は、自身の子育ての悩みや不安を、同じ立場の親同士で情報交換でき、悩みを共有することで親にとっての学びの場、悩みの解決、不安を解消できる場となっています。ゆったりとした雰囲気の中かで話ができることは、悩みごとの相談につなげる手立てとして有効です。

イ 参加しやすい環境の整備

休日や労働時間がシフト制となっている職種も多く、労働形態が一層多様化している現代社会において、親が従来型の講座・研修会に参加しにくい状況が考えられ、近年のコロナ禍はそういった状況をさらに加速させています。そのため、講座・研修会等の開催にあたっては、多忙な親が参加しやすいように、親が集まる学校の行事等と同日開催するなど、場所や時間等の工夫が考えられます。また、これまでの形式にとらわれず、オンラインを用いた学習プログラムと対面型を組み合わせた学習方法を展開していくことも有効な手立てとして考えられます。

ウ 親や地域住民に向けた情報発信・提供

活動の概要を紹介するチラシやパンフレットの作成、ウェブサイトやブログ、SNS、動画配信サイト、育児情報を掲載したアプリの活用など様々な手段で情報発信・提供に取り組んでいる団体があります。このような取組は、共働き等、参加したくても参加できない親に研修会や講演会等の様子を伝える方法としてとても有効です。



(3) 家庭教育支援活動に携わる人材の育成・確保

ア 家庭教育を支援する人材の育成

実地調査を行った団体では、支援を必要とする親に学びの機会を提供するだけでなく、今後も支援を継続していくために、メンバーの育成や学びの機会を提供しています。また、県では、「あおもり家庭教育アドバイザー」の養成およびスキルアップに取り組んでいます。家庭教育支援に関する講座や研修会等においては、一定の知識・スキルが必要になると考えられることから、それぞれの地域で核となって家庭教育を推進する人材を育成する取組を継続する予定です。

イ 家庭教育を支援する人材の力量形成の必要性

実地調査先には、親からの相談対応を行っている団体があり、子育てで悩んだ時に話を聞いてもらえる存在がいるだけで、なにか悩んだらそこにいけばいいという親の安心感につながっている様子を伺い知ることができます。これからの講座・研修会等では、教授型にとらわれない企画が求められるようになって考えられますが、その際、親がちょっとした悩みを相談できるような「場」が重要となります。そのため、支援する側には、困りごとが発生する前に、親が気軽に相談できる「場」をコーディネートし、しっかりと受け止める力量が求められます。

ウ 家庭教育支援団体の継続的な運営

自分の生まれ育った地域以外の場所で子育てをする場合、周囲のサポートを十分に得られず、悩みや不安を抱えながら子育てに直面するケースも見られることから、地域で活動する団体の存在意義はとて大きく、継続した活動が大いに期待されます。既存団体が活動を継続する上で工夫していることとして、メンバーの「やりたい」を大事にし、それぞれの関心に基づいて楽しく活動することが挙げられます。地域での活動を継続させていくことは決して簡単なことではありませんが、肩ひじを張らずに、無理せず、メンバー全員が楽しみながら活動することは、団体を継続させる大きな要因だと考えられます。

また、若い世代をうまく巻き込んで活躍できる場をつくることや、参加者や利用者、ボランティアへの声掛けを通じて活動に加わってもらうことも、次代の活動の担い手を増やす上で重要です。

エ 子育てを通じて地域がつながる環境づくり

かつては、町内会や子ども会、PTAなどの地域組織が媒体となって親と地域の関わりを促進していましたが、そういった組織の活動が衰退している現在、幼少期から地域とつながることができる仕組みが求められています。

そのため、子育て中の家庭に対して、もっとも身近で、子どもをきっかけに関わることになる学校区を軸に、地域の大人をはじめ、家庭教育支援チームを含めた家庭教育支援団体や児童館・児童センター、民生委員・児童委員、保育所・幼稚園等が連携して、地域の子もたちの育ちに積極的に関わるのが重要です。その際には、親同士のつながりや、親と地域住民、家庭教育支援団体等とのつながりを促進し、子どもと共に親も地域で育つことができるよう支援していくことも、有効な方法であると考えられます。



4 家庭教育支援者に求められること

家庭教育支援者に求められるもの

家庭教育は親子という私的な関係を通じて行われると見られがちですが、同時に社会の形成者として子どもを教育するという側面もあります。

このため、家庭教育を個々の家庭の努力のみに委ねることなく、担い手である親が学んでいくことを社会として支えていくことが必要です。

親の学びや育ちを応援することが、家庭教育支援の基本です。

ここでは、第2章および第3章を踏まえ、よりよい家庭教育支援者（以下「支援者」）になるために、心得ておきたいことや支援にあたって気をつけたいことなどを具体的に確認します。

(1) 支援者として心得ておきたいこと

○ 支援者は伴走者です。

子育てには不安や心配がつきものです。子育て中は、どうしてもマイナスの感情が出てきてしまいます。親が支援者と関わってよかったと思えるよう、ポジティブな感情にもネガティブな感情にも寄り添いながら、一緒に子育てに取り組んでいこうとする姿勢が大切です。

○ 支援者も共に学ぶ人です。

支援者の役目は、参加者がなにをして欲しいのかを考え、参加者と共に力を合わせることにあります。家庭教育に「こうでなくてはならない」という答えはありません。支援者も参加者も共に学ぶ姿勢をもち、お互いに学び合うことが大切です。

○ 支援者は学びをサポートする人です。

支援者の役目は、参加者が話しやすい雰囲気をつくり、参加者同士が互いに学び合えるようにサポートすることです。参加者ひとりひとりのよいところを見つけ、互いの思いに気づき合うよう手助けすることで、一層学びが深まります。

○ 支援者はつながりをつくる人です。

支援者の役目は参加者同士が知り合い、講座等が終わっても参加者が連絡を取り合い、互いにサポートできるよう手助けすることです。



○ **支援者も参加者のひとりです。**

支援者は、参加者が体験から学べるようにサポートしますが、親が完璧ではないように、すべてを正しく行うことのできる支援者はいません。支援者も参加者との活動の場のなかで多くを学ぶことができます。

○ **支援者もつながりが大切です。**

いくら思いがあっても支援者がひとりで活動するには限界があります。同じ志をもつ仲間や子育て経験者、PTA関係者、身近な住民等とつながりながら、学校や幼・保・子ども園、各施設、団体等との連携を深め、地域全体で支援することが大切です。

○ **関係機関等へつなぐことも必要です。**

支援者は専門家ではありません。多様化する親の不安や悩みに対して、すべて自分で解決しようと思わず、必要な支援が可能と思われる団体・専門機関等を紹介することも必要です。

(2) 支援にあたって気をつけたいこと

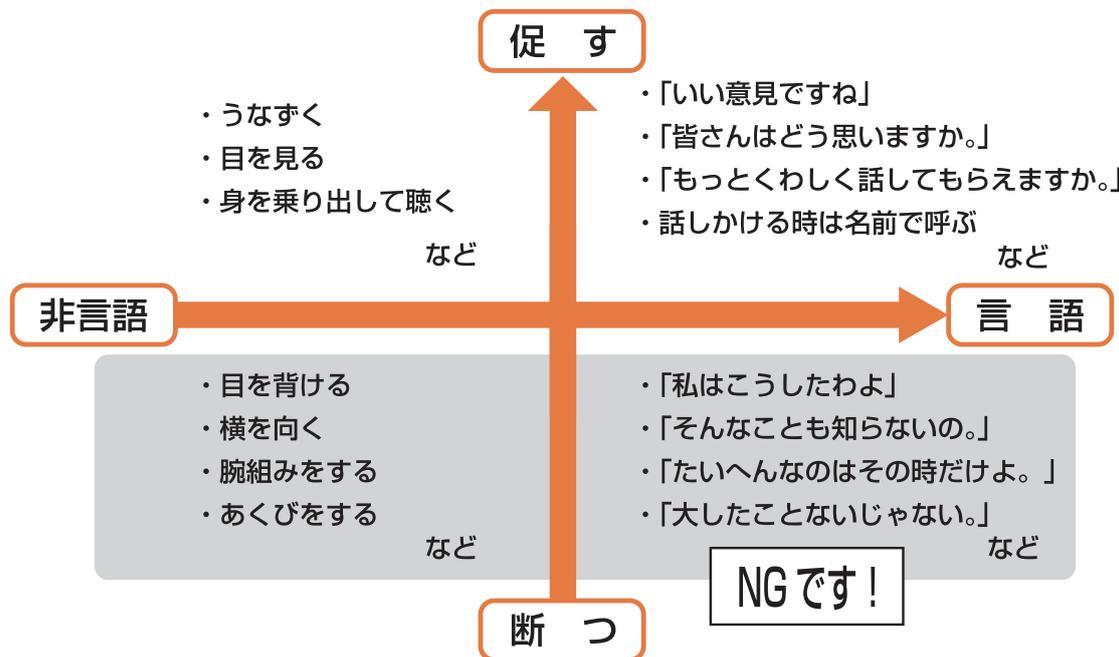
ひとりひとりの価値観はそれぞれ異なり、まったく同じということはありません。グループや集団のなかには幅広い価値観が存在しますが、自分や誰かの価値観を他人に押しつけることがないように気をつけることが大切です。支援者はあくまで中立を保ち、参加者ひとりひとりの考え方や価値観が尊重されるように努めましょう。

ア 聴くとき・話すとき

○ **支援者は積極的に聴く。**

支援者は積極的に聴くことが大切であり、参加者の内側にある感情も含めた気持ちに耳を傾け、寄り添うということです。批判やアドバイスはせず、うなずいたり、参加者の気持ちをそのまま言葉にするなどして、積極的に聴いていることを態度で示すことも大切です。支援者が積極的に聴くことで参加者は肯定的に自己評価できるようになります。また、支援者が積極的に聴いていることが伝わると参加者同士が互いの発言を尊重するようになります。

<よりよいコミュニケーションのために>



○ 相手の状況に応じて対応する。

支援者の役割の大半は聴くことであって話すことは重要ではありません。支援者が話しすぎると相手が自分の意見や気持ちを話せなくなります。また、つかう言葉に気をつけ、相手に馴染みのあるような言葉をつかいましょう。

イ 講座・子育てサークル等の運営場面

○ 学びの場の雰囲気づくりをこころがける。

受付時に参加者ひとりひとりに挨拶をすることや早く来た参加者と会話をする、机の配置に配慮するなど、あたたかく歓迎されているということが感じられるような学びの場の雰囲気をつくることは、支援者の役割です。また、リラックスした雰囲気はそのまま発言に反映されますので、笑いがあることも重要です。

○ 安心の場であることを約束する。

ワークショップや話し合い、相談を受ける場合などで大切なこととしては、運営者と参加者間、または参加者同士が、この場所で安心して話ができるという確認ができ、そこで知り得た個人に関わる情報などは、支援者はもちろん参加者も外に漏らさないという約束が必要です。

※『ワークショップ』とは、体験型の講座やグループ学習のことです。

○ **参加しやすい開催方法を工夫する。**

労働形態が一層多様化している現代社会において、親が従来型の講座・研修会に参加しにくい状況が考えられるため、講座・研修会等の開催にあたっては、多忙な親が参加しやすいように、内容や場所、時間等の工夫が求められます。そのひとつとして、オンラインを用いた学習プログラムは、有効な手立てとして考えられます。

○ **充実した学びの場にする。**

参加者のなかにはワークショップ等への参加が不慣れであり、なかなか発言できない人もいます。そのような参加者もなにも考えていないわけではありません。大切なことは、参加者の発言を尊重し、受け入れられていることを実感してもらい、参加者が自分の価値観を振り返る機会を提供することで、支援者が教えるのではなく『参加者が気づくこと』です。

参加者が主体的に参加するためには、参加者が興味をもち、積極的に発言できるようなプログラムづくりを心がけます。また、参加者により多くの発言をしてもらうためにグループ活動も取り入れ、個々の発言を確保することも必要です。

○ **参加者へ柔軟に対応する。**

よりよい学びの場にするために、綿密なプログラムを作成することが大切ですが、参加者には柔軟に対応することが必要です。参加者の様子を見て計画を変更できるようにしておかななくてはなりません。



(3) 支援者としての力量形成に努める

支援を必要とする親に学びの機会を提供することや、親が気軽に相談できる「場」をコーディネートし、しっかりと受け止めるなどの力量が求められます。そのため、支援者としての必要な基本的知識、ノウハウを身につけていくことはとても重要です。

ア 親の悩みや不安への対応

子育てで悩んだ時に話を聞いてもらえる存在がいるだけで、なにか悩んだらそこにいけばよいという親の安心感につながります。講座や研修会などの交流を通して、互いに「顔見知り」から「挨拶・世間話をする間柄」、さらには「悩みごとを打ち明け、相談する間柄」へと信頼関係が深まっていきます。支援を必要とする親が、不安や悩みを安心して相談できるよ

うになるために、お互いの信頼関係を築くための力量を高めていくことが大切です。

また、子どもの発達障がいなどの専門的な知識や経験を要する相談に関わることが今後考えられますが、21ページでも説明しているとおり、支援者は専門家ではありません。対応に困った場合は、専門機関等を紹介するなど、無理のない対応をしましょう。

イ 多様な情報発信・提供のための知識や技術の習得

第3章「今後の家庭教育支援の在り方」の(2)「新しい家庭教育支援の普及啓発・学習機会の方向性」(P16)でも説明していますが、共働き等、参加したくても参加できない親に講座や研修会等の様子を伝える方法として、チラシやパンフレットの作成、ウェブサイトやブログ、SNS、アプリの活用など様々な手段で情報を発信することは有効な取組です。多様な手段で情報発信するための知識や技術を身につけることで活動の幅が広がります。

ウ 講座や研修会等の積極的な活用

支援者に関係すると考えられる知識やノウハウとして、たとえば以下のようなものが考えられます。基本的な知識、ノウハウの取得には、県主催の講座や県が作成した学習プログラムの活用も効果的です。

	基本的知識 (例)	県主催講座等
家庭、家庭教育支援に関すること	家庭を取り巻く課題など	・「あおもり家庭教育アドバイザー」の養成およびスキルアップ講座 ・あおもり親楽プログラム
子どもに関すること	子どもの成長・発達に関すること	
保護者の学習機会に関すること	ワークショップの手法など	・あおもり家庭教育応援フェスタ ・家庭を支える連携・協働セミナー ・青森県家庭教育支援ネットワーク形成研修会 ・祖父母向け孫育て研修会 ・読み聞かせの大切さを伝える「親子ふれあい読書アドバイザー」の養成 ・あおもり子育てネット(家庭教育支援動画等)
地域に関すること	情報収集・ネットワークづくりなど	
そのほか	生活習慣づくりに関することなど	

県では、家庭教育支援に関する専門的な知識や実践的な技術を習得する講座、現代的な課題にも対応できる力を身につける講座など、様々な研修を実施しています。県が実施する研修等を活用しながら、支援者としての資質向上を図っていくことをおすすめします。講座や研修会等に参加することで、支援者同士のつながりが生まれ、日頃の悩みを気軽に相談し合える関係を築く良い機会となります。

また、県教育委員会には、支援者を見守り、支援する存在として社会教育主事があります。講座や研修会等の問い合わせ、家庭教育支援に関わる相談等がある場合は、お気軽に御連絡ください。

(連絡先などは、巻末を御覧ください。)



5 家族としてできること

家族としてできること

地域の家庭教育支援者の存在も大切ですが、親たちにもっとも近い存在である自分の親や兄弟（子どもから見ると祖父母やおじ、おば等）の家族が支援者として家庭教育を応援していくことが大切です。

（１）家族だから関わり過ぎてしまうこと

「目に入れても痛くない」と例えられるほどかわいい孫やおい、めい。

かわいさのあまり、ついつい口を出してしまうことはないでしょうか。家族は、自分の経験をもとに、いろいろ親にアドバイスをしてくれます。それが、親の思いや考えと一致していたり、親が素直に受け入れられるものだといいいのですが、往々にして、そこに隔たりがあると子どもたちには、迷いや不安が生じたりすることがあります。家族として子どもを思う気持ちがあるからこそだと思いますが、親に第一義的な責任があることを肝に銘じておきましょう。また、祖父母世代と親世代では、子育てを巡る環境や方法も大きく変化してきています。そのことを理解して、親と子どもに接することが大切です。

（２）祖父母・家族に求められる親への支援

祖父母には、親にない経験があります。経験から培われた知恵や技で親を支援してあげましょう。ただ、孫は自分の「子ども」ではありませんから、「孫で、子育てのやり直し」はできません。自分の子どもを信じて、祖父母は応援団に徹しましょう。

忙しい親に代わって、自分の子どもが好きだった絵本を読み、親の子どもの頃について話してあげるのもいいかもしれません。祖父母だからこそできる関わり方を探してみましょう。

また、祖父母のほか、おじやおば等を含め家族だからこそ、親を理解し、支援できることがあります。特に現代は、働く女性が増えています。親の仕事と子育ての両立をサポートするなど、困った時に手助けすることができるような支援が親にとっては大きな心の支えにもなります。大切なことは、親の気持ちに寄り添うことです。

<参考資料>



岐阜県では、祖父母が孫やその親と良好な関係を築きながら、子育てのよりよいサポーターとなってもらうための冊子「孫育てガイドブック」を発行しています。近年増加している祖父母世代からの孫育てに関連した相談事例をもとに、子育てに関する世代間ギャップを解消するためのノウハウや、現在主流の育児方法等を紹介しています。どうぞ、参考にしてください。

『孫育てガイドブック』～孫でマゴマゴしたときに読む本～

https://kosodate.pref.gifu.lg.jp/?act=information_s_papa



<孫で「子育て」のやり直しはできません>

わが子に「もっとこうすればよかった」という思いが、孫に向かってしまう祖父母は少なくありません。しかし、自分の娘や息子が期待通りの進路を進んでくれなかったらからといって、孫に期待にするのはお門違いです。

「孫で、リベンジを！」という意気込みは、孫にとっても、あなたの子どもにとっても迷惑でしかありません。あなたの育てた子どもを信頼しましょう。期待通りではなかったかもしれませんが、もう立派に『人の親』になっているのですから。

<『経験』があるからこそ、親の良きサポーター役に>

2歳頃になると、「イヤ」「ダメ」という言葉を覚え、親の言うことを聞かずに、わがままをいうようになってきます。これは『自我の目覚め』で必要な成長の過程なのですが、親たちは喜ぶどころか「子育てが間違っていたのではないか」と不安になったりします。怒鳴ったり、たたいてしつけしようとする親も出てきます。祖父母は、こうやって成長していくのだということを知っていますが、経験のない親にはわからないことなのです。

そんなときこそ祖父母の出番です。不安な親に、「いい子に育てているよ。大丈夫だよ。」と声をかけてあげましょう。親だってほめられるのはうれしいものです。気分が良くなって子どもとの接し方にもゆとりが出てきます。「育て方が悪い」と親を責めたりしたら、「子どものせいでこっちが怒られる」と矛先が孫に向くことだってあります。

<夜の寝かしつけに「お話」を>

孫を寝かしつけるチャンスがある方にオススメなのが「むかしむかし、あるところに…」というお話です。孫の名前や親の名前を入れて脚色したり、「新作」を語ったりするのもいいですね。昔から「語り部」は年寄りの役割でした。

<孫の心のオアシスに>

いよいよ小学校入学。「しつけ」だけではなく、親は子どもの「教育」でいろいろ悩むものです。子どものことが心配で、親が怒る場面も増えるでしょう。三世代同居が多かった時代、親に怒られると、子どもは祖父母の部屋に逃げたものですが、核家族化が進み、今の子どもたちは昔のような逃げ場がありません。「甘やかさないで！」と親は言うかもしれませんが、子どもにとって「甘え」が受け入れられることは必要なことです。

親はしっかり育てなきゃと思うあまり、肩に力が入って、ついつい厳しくなってしまいます。祖父母は、そんなときの『ちょっとした逃げ場所』…それが、子どもの心にとって必要なのです。

祖父母が甘いからといって、子どもが親より祖父母を選ぶということはありません。自分たちは孫にとっての「心のオアシス」だと思って、たっぷり甘えさせてあげましょう。

<長寿時代の孫育て>

現在、孫を見ることができるのは男性が約59歳以降、女性が55歳以降と言われていますが、平均寿命が80歳を越えた今、孫育てにも大きな変化が起こってきました。以前の寿命はせいぜい孫の学童止まりでしたので「かわいい、かわいい」と孫のすべてを受容していればよかったです。長寿社会では、孫が思春期を迎えてもますます元気という祖父母が増えています。『教育ジジ・ババ』として、孫を直接指導しようとする祖父母も少なくありません。

けれども『思春期』は大変な時期です。壮年期の親でさえそれを受け止めていくのは結構困難です。気持ちはあっても、体力・気力で劣る祖父母がその怒涛を受け止めようとするところから来る、孫とのトラブルも目立ってきています。

孫を育てるのはあくまでその親だ、ということをおぼろげに忘れることなく、孫との長い付き合いを楽しめたらいいですね。

<「育児なし」の父だったのに…>

生き生きと「孫育て」をしている夫を見て、複雑な気持ちになる方もあります。自分の子どもの世話なんかにもしなかったのに…全部…私に任せきりだったのに…と。つい嫌みの一つも言いたくなります。

言いたかったら言いましょう。30年遅れでも、子育ての大変さや辛さを夫に味わわせてくれた「孫の存在」に感謝しましょ。

<祖父母の最大の仕事は、老いていく姿を子どもに見せること>

祖父母との関わりの中で、子どもは人が老いていく過程や、病気、死といったことについても学んでいきます。命を粗末にする若者が増えているのは、身近な死を経験してないからではないでしょうか。何もしなくても、祖父母は「存在しているだけ」で意味があるのです。

6 あおもり親楽プログラムの活用方法

(1) あおもり親楽プログラムの流れ

プログラムの標準的な流れです。実施時間は、およそ60分で設定しています。全体の時間に合わせ、それぞれの活動時間を調整することができます。

時間	学習活動	展開のポイント
10分	学習の約束 アイスブレイク グループ分け	<ul style="list-style-type: none">参加者みんなで学習の約束（下記参照）を確認します。みんなが安心して学習できるようにします。参加者の緊張をほぐし、場の雰囲気をやや和やかにします。話し合い等がしやすい人数でグループを作ります。
40分	ワーク	<ul style="list-style-type: none">エピソード等をもとに、個人やグループでワークを行います。互いに感じたことや経験を話し合い、楽しく学び合います。グループで話し合った意見を全体に紹介します。話し合い等がスムーズに進むよう、進行役がサポートします。
10分	ふりかえり	<ul style="list-style-type: none">参加者の気づきを記入します。みんなで意見を共有しながら学習を深めます。

このプログラムでは、参加する誰もが気をつけることがあります。みんなが楽しく安心して学習できるよう、はじめに学習の約束を確認しましょう。

学習の約束

1 お互いの考えや感じ方を尊重しましょう

ほかの人の意見をしっかり聞き、自分のなかの変化を感じてみましょう。また、ひとりで話し過ぎないように気をつけ、みんなの話す機会を大切にしましょう。

2 学び合いを楽しみましょう

参加者同士が意見や感想を話し合い、みんなで作っていく学習プログラムです。発言は強制ではありません。リラックスして参加し、学び合いを楽しみましょう。

3 プライバシーを守りましょう

ここで知った個人情報（個人名、住まい、学校名等）はもちろんのこと、プライバシーに関わることは絶対にほかの人に話さないでください。プライバシーが守られることで、みんなが安心して参加することができます。

(2) あおもり親楽プログラムの進め方

このプログラムは、学習の「進行役」が進めます。進行役は学習を計画し、実施します。

■ 学習の計画

1 プログラムを選ぶ

誰を対象に、どのようなねらいの学習を実施するのかを検討し、プログラムを選定します。

2 プログラムの展開を工夫する

「手引き(展開例)」には、プログラムの具体的なねらいと展開例、関係資料を掲載しています。展開例は、参加者の状況や関心、人数、使用する場所、時間等に応じてアレンジし、楽しく学習できるように工夫します。

3 学習形態を決める

話し合いやワーク等が効果的に行えるグループの人数の目安は4～6人です。予めグループ分けをしておいたり、アイスブレイクのなかでグループ分けをするなど、グループ分けの仕方を工夫します。

4 実施するスタッフを確保する

進行役はひとりでもできますが、参加者等の状況によっては、複数の進行役で進める方がよい場合もあります。また、受付や資料の準備等をする人がいれば、よりスムーズに進みます。

■ 進行役の役割

進行役は、話し合いや参加者の交流がスムーズに進むよう、参加者の様子を見ながら声がけし、参加者の気づきや学びを助けることが役目です。

進行役は、次のことに気をつけて、学習を実施しましょう。

● 参加者が安心して学習できるような雰囲気をつくる

自信をもってゆっくり話すなど、進行役を信頼してもらえるよう心がけます。ワークには正解がないことや「学習の約束(P30)」を確認し、参加者の不安を解消します。また、参加者みんなが話したり聞いたりできるようにします。

参加者に発言を強要したり、一部の人だけの意見を聞いたりしてはいけません。

● 参加者の主体性を尊重し、自らの気づきを引き出す

ひとりひとりの発言をよく聞き、話し手の思いに焦点を当てたり、要点を整理したりして、参加者の気づきを大切にします。

参加者の発言を批評したり、進行役の意見を押しついたりしてはいけません。

● 流れの調整をする

参加者がワークの手順を理解しているか、時間が足りているかなどを、確かめながら進めます。参加者に合わせた進行を心がけ、流れを調整します。計画どおりに進まないことも予測しておきます。

※進行役の役割の範囲を超える問題については、相談できる関係機関等を紹介しましょう。

(3) あおもり親楽プログラムの使い方

● プログラム

エピソードが書いてあります。参加者が互いに感じたことや経験を話し合う、学習のきっかけにします。

ワークの流れが書いてあります。

直接書き込みすることができます。

1 支援者を対象としたプログラム

プログラム 1-1 誰のための講座だろう？
～参加者が主体的に話し合うためには～

エピソード

小学生の子どもをもつアサコさんは、地域の子育てサークルが主催する家庭教育講座に参加することにしました。初日の今日は、講話のあとにグループワークがあり、同じ年頃の参加者と講話の感想などを話し合っていました。

ところが、グループワークが20分くらい早く終わりました。アサコさんは「せっかくだから、もっと、おしゃべりしたいわ。」とつぶやきました。同じグループの人たちもうなずきました。すると、突然、「時間が少し余りましたので、わたしの経験をお話します。わたしには子どもが・・・」と、主催者のマナミさんがマイクを握り、自分の子育ての体験談をはじめました。

「えー。」アサコさんは、がっかりして周りを見ると、みんなも下を向いています。

マナミさんは、得意げに話し続けています。



ワーク1

エピソードを読んで次のことについて話し合います。
アサコさんや参加者の気持ちを考えてみましょう。

ワーク2

主催者のマナミさんはどのようにすればよかったのでしょうか？

ワーク3

参加者が主体的に関わるためには、どんな方法があるのでしょうか？

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

エピソードはそのままコピーして使えます。

書き込み欄はそのままコピーして使えます。部分的に活用することもできます。

● 手引き（展開例）

プログラムの具体的なねらいと展開例が書いてあります。

プログラムを展開するときに押さえるポイントや注意点が書いてあります。

手引き（展開例）

プログラム 1-1 誰のための講座だろう？
～参加者が主体的に話し合うためには～

ねらい 参加者が主体的に関わることの大切さを考える。

プログラム説明 子育てサークル等が講座等を開催する時、支援者側の考えに参加者を導こうとしてしまいがちです。大切なことは、参加者が講座等に主体的に参加することです。ここでは、参加者が主体的に関わるためにはなにが大切かについて取り上げます。

主な対象・時間 対象／家庭教育支援者 時間／60分

展 開 例	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の約束（P30）を確かめる。 ・参加者の緊張をほくし、場を和やかにする。 ・グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
15分	<p>ワーク1</p> <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② アサコさんや参加者の気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アサコさんや参加者がどんな気持ちで講座に参加してきたかに気づけるようにする。
10分	<p>ワーク2</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 主催者のマナミさんはどうすればよかったのか記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・主催者のマナミさんが参加者の気持ちに寄り添っていないことに気づけるようにする。
15分	<p>ワーク3</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 参加者が主体的に関わるためにどんな方法があるか記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援者は参加者が主体的に関わるための手助けをすることが大切であることに気づけるようにする。 ※P20～24参照
10分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 ○ 資料を参考に、支援者としての心構えなどについて、お互いが確認する。（P20） 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人が発表してもらい共有する。

参加者の状況等に応じて、アレンジして使います。

7 プログラムの実際

I 支援者を対象としたプログラム

プログラム I-1

誰のための講座だろう？ ～参加者が主体的に話し合うためには～

エピソード

小学生の子どもをもつアサコさんは、地域の子育てサークルが主催する家庭教育講座に参加することにしました。初日の今日は、講話のあとにグループワークがあり、同じ年頃の参加者と講話の感想などを話し合っていました。

ところが、グループワークが20分くらい早く終わりました。アサコさんは「せっかくだから、もっと、おしゃべりしたいわ。」とつぶやきました。同じグループの人たちもうなずきました。すると、突然、

「時間が少し余りましたので、わたしの経験をお話しします。わたしには子どもが・・・」と、主催者のマナミさんがマイクを握り、自分の子育ての体験談をはじめました。

「えー。」アサコさんは、がっかりして周りを見ると、みんなも下を向いています。

マナミさんは、得意げに話し続けています。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。
アサコさんや参加者の気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

主催者のマナミさんはどのようにすればよかったのでしょうか？

ワーク 3

参加者が主体的に関わるためには、どんな方法があるのでしょうか？

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

手引き（展開例）

プログラム I-1

誰のための講座だろう？ ～参加者が主体的に話し合うためには～

ね ら い

参加者が主体的に関わることの大切さを考える。

プログラム説明

子育てサークル等が講座等を開催する時、支援者側の考えに参加者を導こうとしてしまいがちです。大切なことは、参加者が講座等に主体的に参加することです。ここでは、参加者が主体的に関わるためにはなにが大切かについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／家庭教育支援者

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> • 学習の約束（P30）を確かめる。 • 参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 • グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
15分	ワーク1 ① エピソードを読む。 ② アサコさんや参加者の気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> • アサコさんや参加者がどんな気持ちで講座に参加してきたかに気づけるようにする。
10分	ワーク2 ① 主催者のマナミさんはどうすればよかったのか記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> • 主催者のマナミさんが参加者の気持ちに寄り添っていないことに気づけるようにする。
15分	ワーク3 ① 参加者が主体的に関わるためにどんな方法があるか記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> • 支援者は参加者が主体的に関わるための手助けをすることが大切であることに気づけるようにする。 ※P20～24参照
10分	ふりかえり <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 ○ 資料を参考に、支援者としての心構えなどについて、お互いで確認する。（P20～24参照） 	<ul style="list-style-type: none"> • 何人が発表してもらい共有する。

I 支援者を対象としたプログラム

プログラム I-2

聴くことの大切さ ～相手の心に寄り添って～

エピソード

トシコさんは、子育てサークルのメンバーです。今日は「子育てカフェ」の日。そこに、あかちゃんを抱えたシオリさんが、相談にやってきました。担当のトシコさんは、はりきって話を聴きはじめたのですが…。

シオリ：「あの一、子どもが1歳で」

トシコ：「男の子、女の子、どっち？わたしには、子どもが3人いて・・・」

シオリ：「あの一、この子がミルク」

トシコ：「ああ、ミルクを飲まないのね。それは・・・、わたしの・・・」

シオリ：「あの一、ミルクを離さ」

トシコ：「ああ、それは・・・」

シオリさんが、話しているそばから、トシコさんは、話を最後まで聴かずに次々と話します。

シオリさんは、うつむいたまま。

それでも、トシコさんは話し続けます。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。

- (1) このときのシオリさんの気持ちを考えてみましょう。
- (2) このときのトシコさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

トシコさんはどのようにすればよかったのでしょうか？

ワーク 3

相談者は話を聴いてもらうことで相手はどのような気持ちになるのでしょうか？

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

手引き（展開例）

プログラム I-2

聴くことの大切さ ～相手の心に寄り添って～

ね ら い

支援者の役割や聴くことの大切さについて考える。

プログラム説明

子育てサークル等では子育てカフェなどで親の子育ての悩みを聴く機会があります。そんなとき親の悩みを聴かずにアドバイスばかりしてしまうことがあります。ここでは、支援者の役割や聴くことの大切さについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／家庭教育支援者

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の約束（P30）を確かめる。 ・参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 ・グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
15分	<p>ワーク1</p> <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② シオリさんの気持ちを記入する。 トシコさんの気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・シオリさんは、どんな気持ちで子育てカフェに参加してきたか、またトシコさんはどんな気持ちで話をしてばかりいたのかに気づけるようにする。
10分	<p>ワーク2</p> <ul style="list-style-type: none"> ① トシコさんはどうすればよかったのか記入しグループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トシコさんは、シオリさんの気持ちに寄り添わずに話をしてばかりいたことに気づけるようにする。
15分	<p>ワーク3</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 聴いてもらうことで相手はどのような気持ちになるか考え、記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者がなにを聴いて欲しくて参加したのか、また、聴いてもらうことで参加者の心が軽くなることに気づけるようにする。 <p>※P20～24参照</p>
10分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 ○ 資料を参考に、支援者としての心構えなどについて、お互いで確認する。（P20～24参照） 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人が発表してもらい共有する。

I 支援者を対象としたプログラム

プログラム I-3

地域でつながるために ～きっかけを大切に～

エピソード

ミナコさんは、子育てサークルに所属しています。先日、団体が主催する子育て講座で司会をしました。

ある日、スーパーで買い物をしていたら、講座に参加したアキコさんを見かけました。

ミナコ：「アキコさん。この前は、講座に参加してくれてありがとうございました。」

アキコ：「こちらこそ、とっても勉強になりました。なんだか心が楽になりました。」

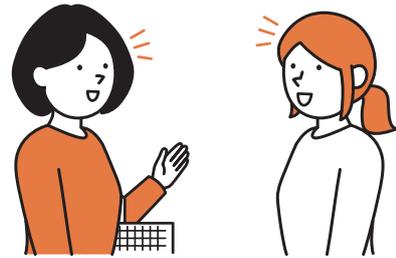
ミナコ：「それは、よかったです。」

アキコ：「今度、また参加してもいいですか。」

ミナコ：「もちろん。ぜひ、また参加してください。

それから、なにか困ったことがあったら、
いつでも相談してくださいね。」

アキコさんは、とても嬉しそうにしていました。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。

(1) ミナコさんの気持ちを考えてみましょう。

(2) アキコさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

参加者とのつながりをつくるために、支援者として必要なことはなんでしょう。

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

手引き（展開例）

プログラム I-3

地域でつながるために ～きっかけを大切に～

ね ら い

支援者が主体的に関わり、参加者とのつながりをつくることの大切さについて考える。

プログラム説明

講座に参加した参加者を日常生活でも見かけることがあります。些細なことでも、参加者がまた講座等に参加するきっかけになることがあります。ここでは、そのような機会を大切に、支援者がつながりをつくることの大切さについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／家庭教育支援者

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の約束（P30）を確かめる。 ・参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 ・グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
20分	ワーク1 <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② ミナコさんの気持ちを記入する。 アキコさんの気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ミナコさんがどんな気持ちで声をかけたのか、また声をかけられたアキコさんはどんな気持ちだったか気づけるようにする。 ・これまで受けた相談事例を共有してもよい。
20分	ワーク2 <ul style="list-style-type: none"> ① 参加者とのつながりをつくるために、支援者として必要なことはなにかを記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者とのつながりをつくるためには、講座等をきっかけに、気軽に話せる関係をつくるのが大切なことに気づけるようにする。 <p>※P20～24参照</p>
10分	ふりかえり <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 ○ 資料を参考に、支援者としての心構えなどについて、お互いで確認する。（P20～24参照） 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人か発表してもらい共有する。

プログラム Ⅱ-1

子育ての主役は誰？ ～祖父母・家族の役割を考える～

エピソード

祖母アケミさんの家に親戚が一堂に集まった時の出来事です。

「ケント、ダメじゃない。」

ケントくんが、いたずらをしたので、母ユキコさんは叱りました。すると

「ユキコさん、なんにもそんなことで、怒らなくてもいいんじゃないの。ケントがか
わいそうよ！」

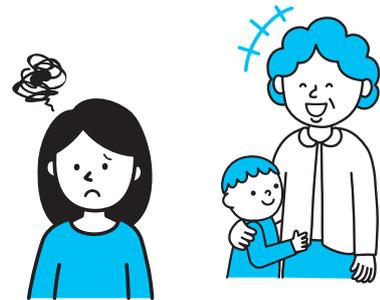
とアケミさんが言いました。ケントくんは、叱ったお母さんを横目に、アケミさん
に抱き付きました。そして、おばミキコさんが

「そうよ、そのくらいのことで。

ユキコさんは叱りすぎよ！」

と、ケントくんの頭を撫でながら言いました。

ユキコさんは、なんともやるせない気持ちになり、
部屋を出ていきました。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。
このときの母ユキコさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

かばった祖母アケミさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 3

ユキコさんが叱ったとき、周りの祖母アケミさんやおばミキコさんは、
どんな風に行動すればよかったですか。

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

プログラム
Ⅱ-1

子育ての主役は誰？
～祖父母・家族の役割を考える～

ね ら い

家庭教育の主体は親であり、家族はそれを支えていくことの大切さについて考える。

プログラム説明

親を支えるはずの祖父母・家族が、親を差し置いて子育てに口を出してしまう場面が多々あります。ここでは、家庭教育の主体は親であり、家族はそれを支えていくことの大切さについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／祖父母・家族

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> • 学習の約束（P30）を確かめる。 • 参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 • グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
15分	<p>ワーク1</p> <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② 母ユキコさんの気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 母ユキコさんが叱ったことに、祖母アケミさん・おばミキコさんが反対し、子どもがアケミさんに抱き付いた時のユキコさんのやるせない気持ちに気づけるようにする。
10分	<p>ワーク2</p> <ul style="list-style-type: none"> ① かばった祖母アケミさんの気持ちを記入しグループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • かばった祖母アケミさんは、母ユキコさんの気持ちを考えずにいたことに気づけるようにする。
15分	<p>ワーク3</p> <ul style="list-style-type: none"> ① ユキコさんが叱ったとき、周りの祖母アケミさんやおばミキコさんはどんな風に行動すればよかったか考え、記入し、グループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 家庭教育の主体は親にあることに気づけるようにする。 <p>※P26を紹介してもよい。</p>
10分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> • 何人か発表してもらい共有する。 • 祖父母として、親や子に対する関わり方について確認する。 <p>※「孫育てガイドブック（岐阜県）」を参考にしてもよい。（P27～28）</p>

プログラム Ⅱ-2

親の親だからこそ① ～祖父母だからできること～

エピソード

祖母ヨシさんは、先日、昔の物を整理していたら、息子が大好きだった絵本が出てきました。息子が何度も何度も読んでといった懐かしい本です。

ある日、孫のユウくんが遊びにきました。いつものようにゲームで遊ぼうとしましたが

ヨシ：「ユウくん、おばあちゃんが絵本読んであげるよ。お膝に座ってね。」

ユウ：「おばあちゃん、本、おもしろい。もっと読んで！」

ヨシ：「お父さんも子どものころに、
この絵本が好きだったんだよ…」

ユウ：「お父さんも…？」

ヨシ：「そうだよ、ここのページが大好きで何回も
『読んで、読んで』って言ったんだよ。」

ユウ：「僕もここ、好き！」

ユウくんも、ニッコリ笑顔になりました。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。
祖母ヨシさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

孫が喜ぶのは、どんな時なのでしょう？

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

プログラム
Ⅱ-2

親の親だからこそ①
～祖父母だからできること～

ね ら い

祖父母にしかできない孫との関わり方について考える。

プログラム説明

人生の経験を積み、自分たちも子育ての苦労を重ねてきた祖父母だからこそできる孫との関わり方があります。ここでは、祖父母だからできることの大切さについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／祖父母・家族

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の約束（P30）を確かめる。 ・参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 ・グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
20分	<p>ワーク1</p> <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② 祖母ヨシさんの気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・孫のユウくんのお父さんが好きだった絵本に触れ、祖母ヨシさんのうれしい気持ちとユウくんもお父さんの好きだった本を読むことを喜んでいることに気づけるようにする。
20分	<p>ワーク2</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 孫が喜ぶのはどんな時なのか考え、記入しグループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームなどの既存のおもちゃではなく、絵本を通して、世代を超えて祖母と孫で心と心を通わせることができることに気づけるようにする。 ※P26を紹介してもよい。
10分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人が発表してもらい共有する。 ・祖父母として、親や子に対する関わり方について確認する。 ※「孫育てガイドブック（岐阜県）」を参考にしてもよい。（P27～28）

プログラム Ⅱ-3

親の親だからこそ② ～祖父母だからできること～

エピソード

離れて暮らす孫ショウタくんが家に遊びに来ました。

祖父コウイチさんは、新しいおもちゃを用意しておきたいと思いましたが、今回は準備できず、少し残念に思っています。

天気がよかったので、コウイチさんはショウタくんと公園に散歩に行くことにしました。

ショウタ：「おじいちゃん、これなに？」

コウイチ：「ドングリだよ。よし！これでなんかつくって遊ぼうか。

さあ、いっぱい拾って帰ろう！」

家に帰り、コウイチさんは、千枚通しと楊枝を用意しました。

ショウタ：「おじいちゃん、なに作るの？」

コウイチ：「うーん、なにができるかな。一緒に作るよ！」

ショウタ：「わあ、コマだ。」

ショウタくんは、そのあと、何度も何度もドングリのコマを回していました。



ワーク 1

エピソードを読んで次のことについて話し合みましょう。
祖父コウイチさんの気持ちを考えてみましょう。

ワーク 2

孫が喜ぶのは、どんな時なのでしょう？

ふりかえり

どんなことに気づきましたか。

プログラム
Ⅱ-3

親の親だからこそ②
～祖父母だからできること～

ね ら い

祖父母にしかできない孫との関わり方について考える。

プログラム説明

人生の経験を積み、自分たちも子育ての苦労を重ねてきた祖父母だからこそ、できる孫との関わり方があります。ここでは、祖父母だからできることの大切さについて取り上げます。

主な対象・時間

対象／祖父母・家族

時間／60分

展 開 例

時間	学 習 内 容	展 開 の ポ イ ン ト
10分	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の約束 ○ アイスブレイク（P48～49参照） ○ グループ分け ○ 自己紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の約束（P30）を確かめる。 ・参加者の緊張をほぐし、場を和やかにする。 ・グループ内で自己紹介する（1人30秒程度）。
20分	<p>ワーク1</p> <ul style="list-style-type: none"> ① エピソードを読む。 ② 祖父コウイチさんの気持ちを記入する。 ③ ②についてグループで話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父コウイチさんも孫のショウタクと一緒に手作りのおもちゃを作ることを楽しそうに思い、ショウタクもコウイチさんと一緒に、材料を集め考えて作ることで喜んでいることに気づけるようにする。
20分	<p>ワーク2</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 孫が喜ぶのはどんな時なのか考え、記入しグループで話し合う。 ② グループの意見を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゲームなどの既存のおもちゃではなく、手作りのおもちゃを通して、世代を超えて祖父と孫で心と心を通わせることができることに気づけるようにする。 <p>※P26を紹介してもよい。</p>
10分	<p>ふりかえり</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 気づいたことを記入し、発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何人が発表してもらい共有する。 ・祖父母として、親や子に対する関わり方について確認する。 <p>※「孫育てガイドブック（岐阜県）」を参考にしてもよい。（P27～28）</p>

8 共通資料

アイスブレイクのいろいろ

プログラムで活用できるアイスブレイクです。目的に合わせて選んで使います。

緊張をほぐし、場を和ませる

1 グー・パー

【展開方法】

- ① 右手はパーにして前に出します。左手はグーにしておなかに置きます。
- ② 進行役の「ハイ」という合図で、手を入れ替えます。前の手はいつもパーで、おなかの手はいつもグーです。
- ③ 数回繰り返します。
- ④ 慣れてきたら、前はグー、おなかはパーにします。
- ⑤ 今度は、手を入れ替えるときに拍手を1回してから、入れ替えます。

2 後出しじゃんけん

【展開方法】

- ① かけ声の練習をします。
- ② 進行役：「じゃんけんぽん」 参加者：「ぽん」
- ③ 「じゃんけん、ぽん、ぽん」にあわせてグー・チョキ・パーのどれかを出します。最初のポンは進行役が出すので、次の「ポン」で参加者は進行役と同じものを出します。以後は、ポン（進行役）、ポン（参加者）とリズムよく続けます。
- ④ 慣れてきたら、進行役に勝つものを出します。次は、負けるものを出します。

3 負けるが勝ち

【展開方法】

- ① 負けた方が勝ちというルールで普通にじゃんけんをします。
- ② じゃんけんの勝ち負けの意識を変えます。

4 じゃんけん肩たたき

【展開方法】

- ① 自由に歩き回って相手を探します。
- ② 相手が見つかったら、握手と自己紹介をしてじゃんけんをします。
- ③ 勝った人は負けた人に肩を10回たたいてもらいます。あいこの時は、お互いに肩を5回ずつたたき合います。
- ④ 相手を変えて、繰り返します。※5分間、5人の相手など、条件を付けて行くとよいでしょう。

5 インパルス

【展開方法】

- ① 全員で手をつなぎ、輪になります。
- ② スタートの人で、隣の人へと次々に握手信号を送ります。
- ③ 最後の人で握手信号を感じたら、「バン！」と叫びます。
- ④ 最後の人で声が聞こえるまでの所要時間を計ります。1回目のタイムを目標として、早く信号が伝わるよう何度か繰り返します。

アイスブレイクのいろいろ

名前を覚えたり紹介したりする

6 他己紹介

【展開方法】

- ① 2人組になります。
- ② 進行役の合図でお互いのことを質問し合います。(時間適宜)
- ③ 順番にパートナーのことをほかのメンバーに紹介します。

7 しりとり自己紹介

【展開方法】

- ① グループに分かれます。
- ② グループ内ではじめに自己紹介する人を決めます。その人の右側の人の名前の最後の一字をとり、その言葉から始まる自分を説明するような形容詞をつけて自己紹介します。
【例】 サイトウカズオ→オトコ前だといわれて困っているササキユウジです→ジュースよりビールが好きなナカムラヨウスケです・・・ユニークな形容詞を付けて楽しみましょう。

活動のためのグループをつくる

8 拍手でグループ

【展開方法】

- ① 進行役が拍手をします。
- ② 参加者は拍手の数で集まり、その場に座ります。
- ③ 練習を1～2回行い、つくりたい人数で拍手をして、グループを作ります。
拍手の代わりに、数を連想させる言葉を言ってもよいです。
【例】 トリオ (3人)、車のタイヤ (4個)、野球 (9人) 等

学習につなぐ

9 子育てフルーツバスケット

【展開方法】

- ① 進行役が子育てのあるあるを言います。「はじめての言葉はママだった」、「ついイライラしてガミガミしてしまったことがある」など。
- ② 参加者は自分に当てはまることだったときに、席を立ち移動する。「親楽プログラム」で全員が移動する。
- ③ 最後に子育ての悩みはひとりじゃないよというメッセージを伝える。

10 いろいろな聞き方

【展開方法】

- ① 2人1組で向かい合います。
- ② ひとりでは自分の長所を4つ話す。聞く人は、その都度反応を変える。「すご～い」、「へ～、そうなんだ」、「そんなのたいしたことない」、「無視」
- ③ 話し手と聞き手を交代して体験する。
- ④ どんな反応のときに、安心感があつたか話し合う。

手法のいろいろ

手引き（展開例）では「話し合う」としているワークを効果的に進めるために、いろいろな手法があります。学習のねらいに合わせて手法を選んで実施します。

ロールプレイ

「ロール」は役割、「プレイ」は演ずるという意味で、役割演技と呼ばれています。参加者が様々な役割を担い、演じることによって、他者の立場になって考えたり、感じたりすることができる手法です。

ブレインストーミング

課題やテーマについて、参加者が自由な発想で意見を出し合って、問題解決の方法を考える手法です。ひとりひとりがラベルやカードなどに自分の考えを記入し、みんなで意見やアイデアを様々な視点から自由に出し合います。学習者すべての意見を大切に扱いながら、話し合いを主体的な態度で進めていくことができます。

KJ法

学習者から出されたすべての意見を大切に扱いながら、グループで分類・整理し、問題解決を図っていく手法です。学習者から出された意見が記入されたカードを、模造紙などの上で、類似した意見ごとに分類します。分類されたものに見出しを付けたり、それぞれのつながりや関係などについて考えたりするなかで、新たな発想につながります。

ランキング

課題やテーマに関して思い付く意見や事柄をカードや一覧表に記入し、学習者が自分にとって大切だと考えるものから順位を付けていく手法です。順位を付けた根拠を整理し、その結果について学習者相互で話し合うことで、新たな気づきを発見したり、自分の考えをまとめたりすることができます。



プログラムシート（プログラムのアレンジや計画に使えます）

プログラム名 (講座名)	
-----------------	--

ねらい	
対象・人数	
日 時	
会 場	
広報の計画	

展 開

時間	学習内容	展開のポイント・注意点	役割（担当）・準備物

アンケート

あおもり親楽プログラムを活用した感想をお知らせください

あおもり親楽プログラムを活用した学習についてのアンケート

- 1 活用したプログラム名 () 活用機会 ()
- 2 「あおもり親楽プログラム」を活用した学習について (あてはまるものに○をつける)
- (1) 参加者等の感想
- ① とてもよかった ② よかった ③ あまりよくなかった ④ よくなかった

(2) あおもり親楽プログラムを活用した学習でよかったこと (3つまで)

- ① いろいろな人の意見を聞くことができた
- ② 子どもとの関わり方のヒントを得ることができた
- ③ エピソードがわかりやすかった
- ④ グループでの話し合いは意見が出しやすかった
- ⑤ 話し合いで出た意見は自分の子育てに生かせそうだ
- ⑥ 話し合いで自分の家庭教育や子育ての悩みが少し解消された
- ⑦ ほかに人と、またはほかの機会にも親楽プログラムを使ってみたい
- ⑧ そのほか (具体的に)

(3) あおもり親楽プログラムを活用した学習で悪かったこと (3つまで)

- ① プログラムの使い方がよく分からなかった
- ② もっと多くのエピソードがあればいい
- ③ プログラムの活用に時間がかかる
- ④ プログラムの書き込み欄をどのように記入したらよいか分からなかった
- ⑤ 家庭教育や子育てでどうすることがよいのか、正しいやり方が分からなかった
- ⑥ 話し合いの後、どのようにまとめたらよいか分からなかった
- ⑦ 資料をどのように提示したらよいか分からなかった
- ⑧ そのほか (具体的に)

(4) あおもり親楽プログラムについてのご意見やご感想を記入してください。

- 3 今後、付け加えたらよいと思われるエピソード (例：いじめへの対応、学校との関わり方など) や研修方法などについてご意見があれば記入してください。

ありがとうございました。アンケートは、下記までお送りくださるようお願いいたします。

青森県教育庁生涯学習課 〒030-8540 青森市長島1丁目1-1 FAX 017-734-8272

第2章に関連する参考資料

1 参考とした調査の概要

(1) 家庭教育支援の充実のための実態等把握調査（青森県教育委員会）

①調査の目的：家庭教育に関する保護者の意識や支援の状況等の把握

②調査対象

- ・県内在住の小学校5年生の保護者 2,033人 ※有効回答数(率)：1,939人(95.4%)
- ・県内在住の中学校2年生の保護者 2,078人 ※有効回答数(率)：1,922人(92.5%)

③調査期間：令和3年1月9日～1月22日

(2) 令和元年度青森県親子等生活実態調査（青森県）

①調査の目的：県内におけるひとり親家庭の生活実態及び福祉ニーズの把握

②調査対象：母子世帯・父子世帯・養育者世帯(児童扶養手当受給者)・寡婦世帯

※調査対象世帯14,148世帯 標本数3,871世帯 有効回答数1,716世帯(回収率44.3%)

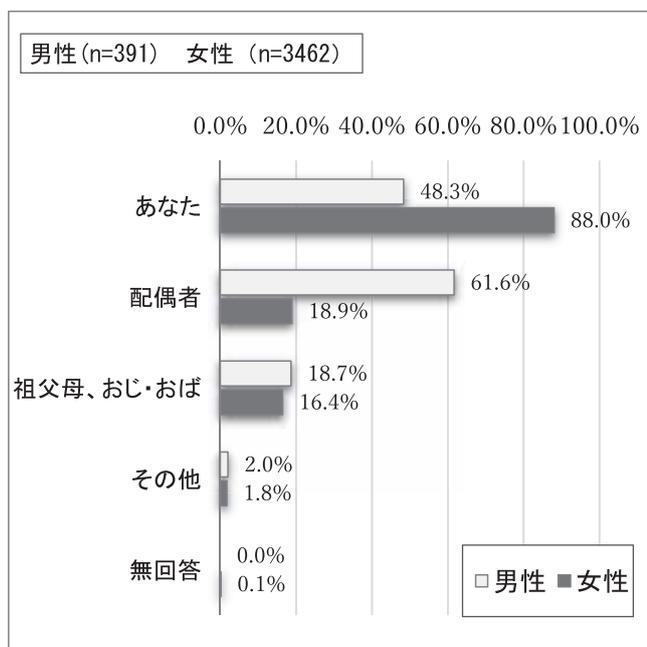
③調査期間：令和元年11月1日～11月30日

※1 図表6及び図表8は青森県親子等生活実態調査より抜粋

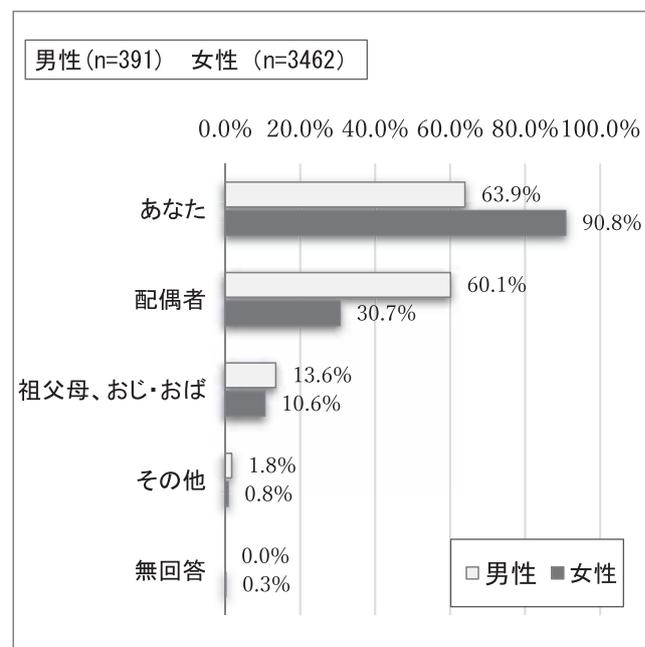
※2 上記以外の図表は家庭教育支援の充実のための実態等把握調査より抜粋

2 資料

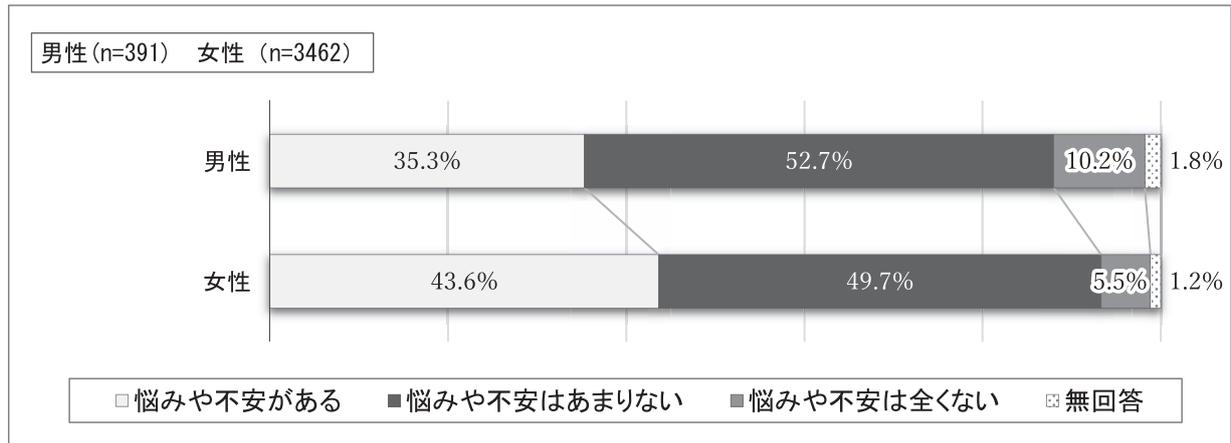
図表1 平日に主に子育てに関わる人(複数回答)／性別



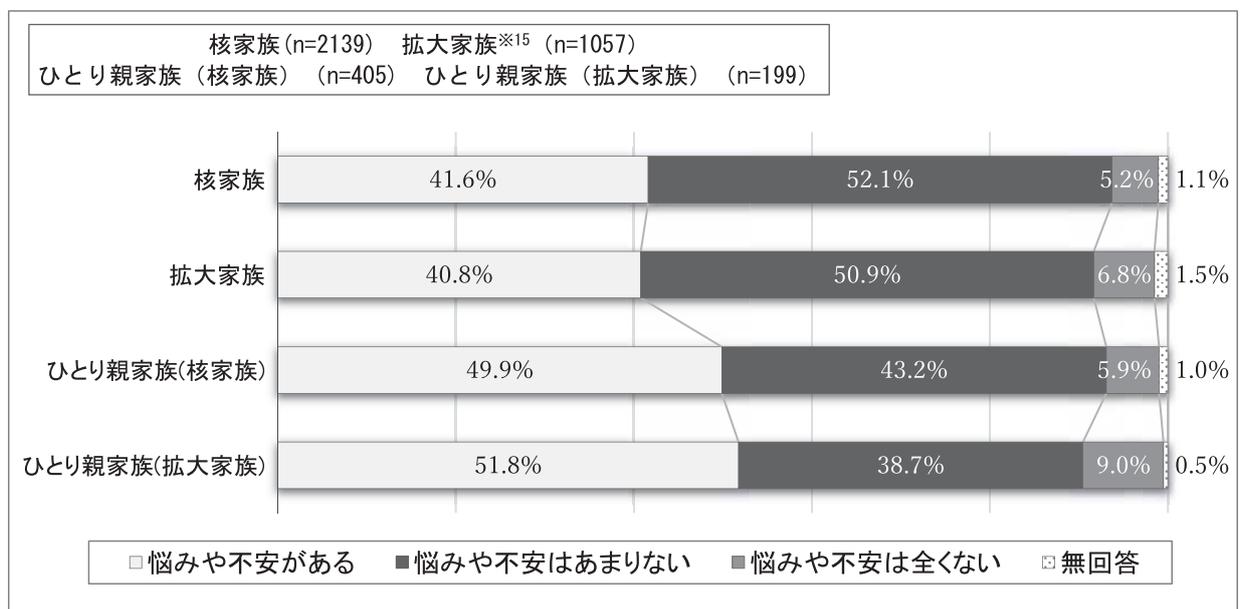
図表2 休日に主に子育てに関わる人(複数回答)／性別



図表3 子育てについての悩みや不安の程度／性別

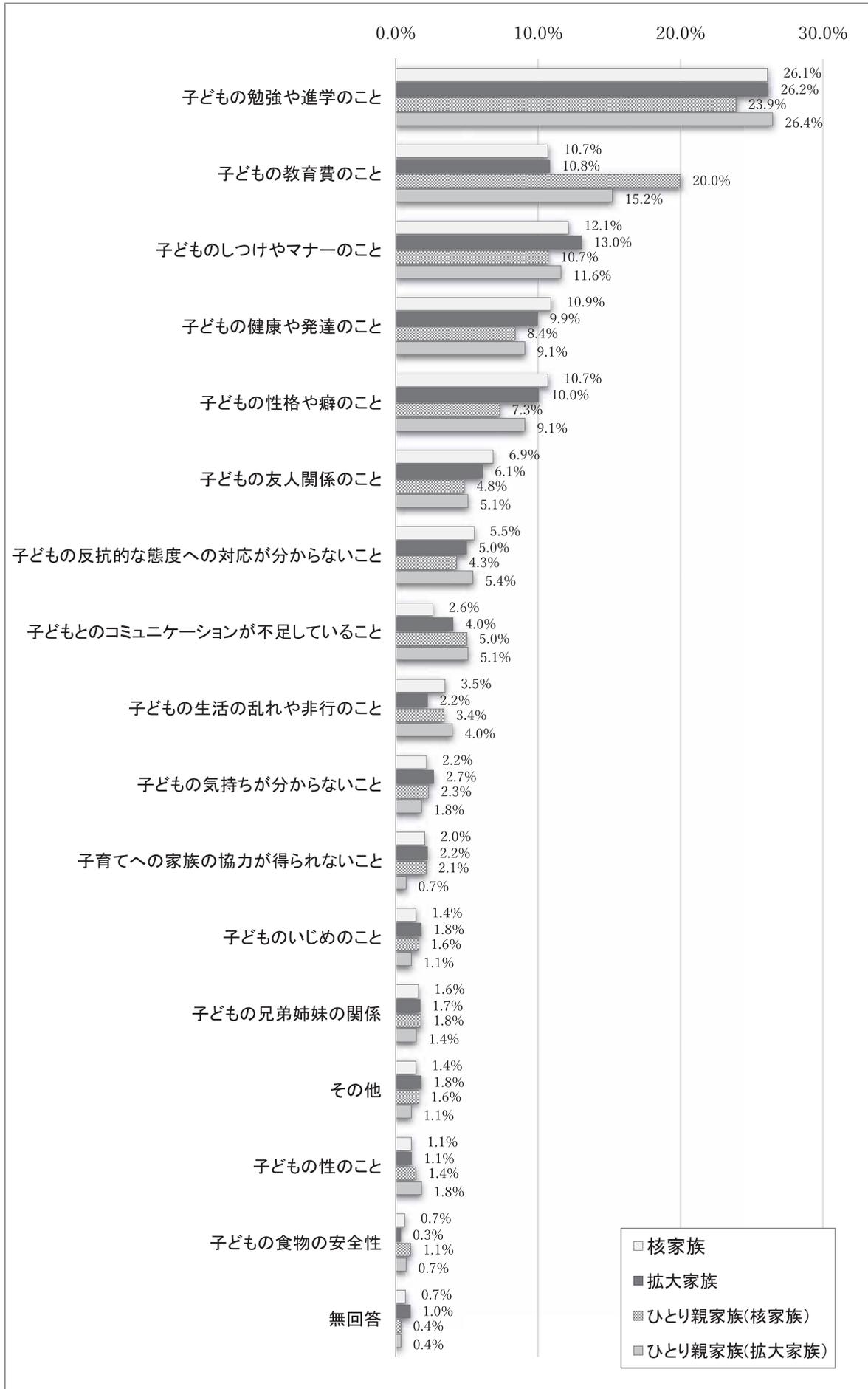


図表4 子育てについての悩みや不安の程度／家族形態別

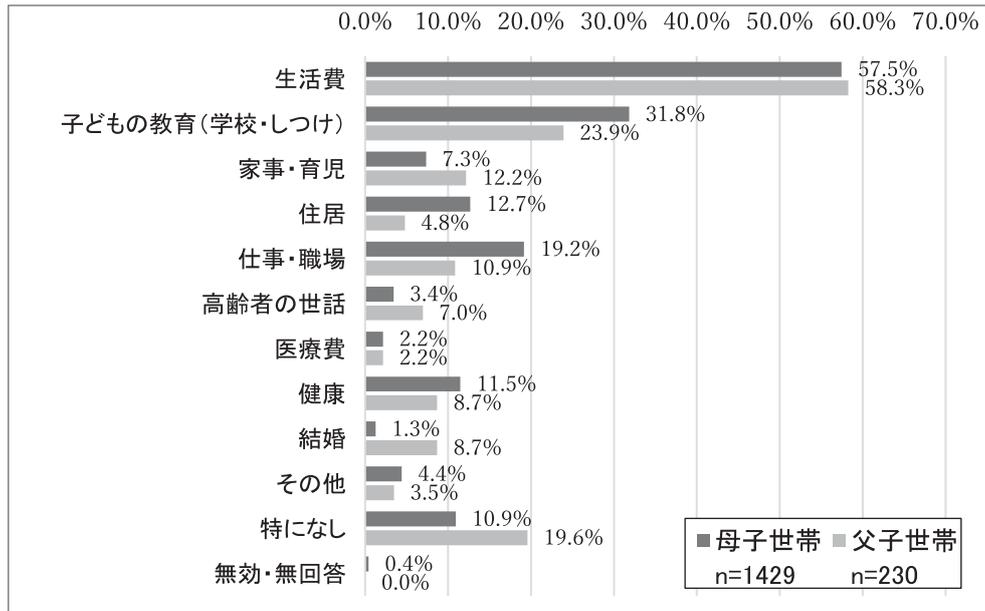


*15 親と結婚した子どもの家族などが同居する家族形態

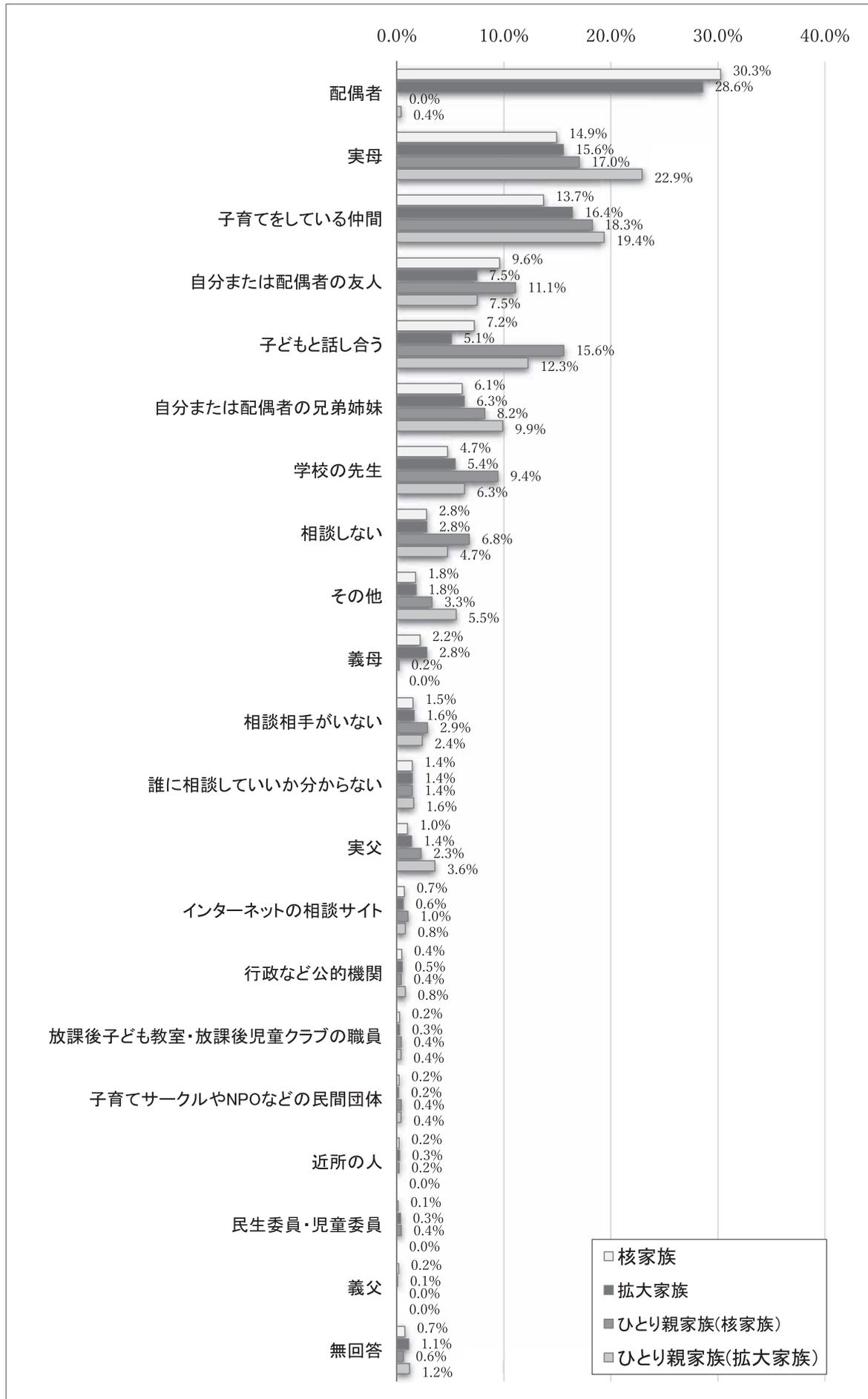
図表5 子育てについての悩みや不安の内容（複数回答）／家族形態別



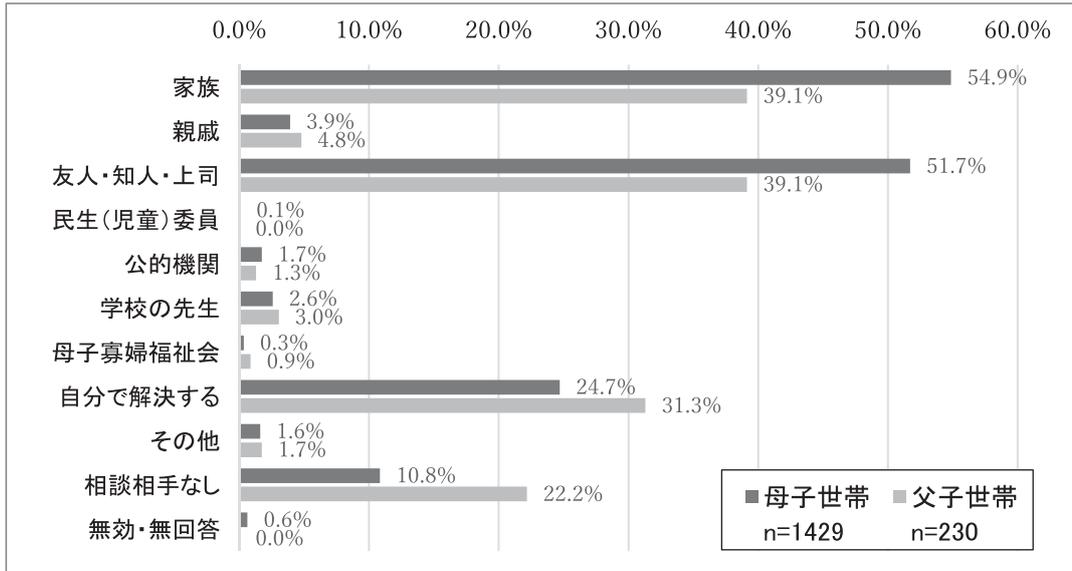
図表6 子育てで困っていること（複数回答）



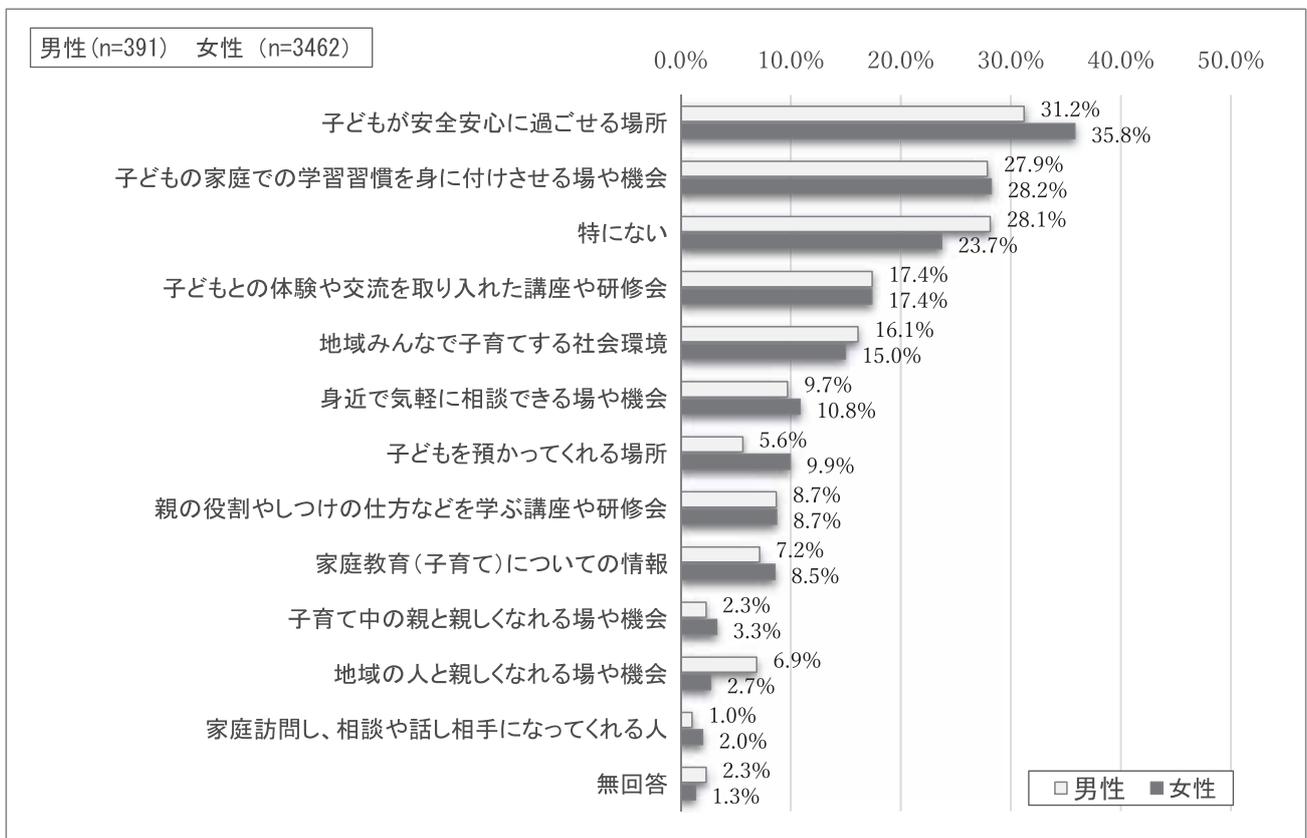
図表7 子育てについての悩みや不安がある場合の相談相手（複数回答）／家族形態別



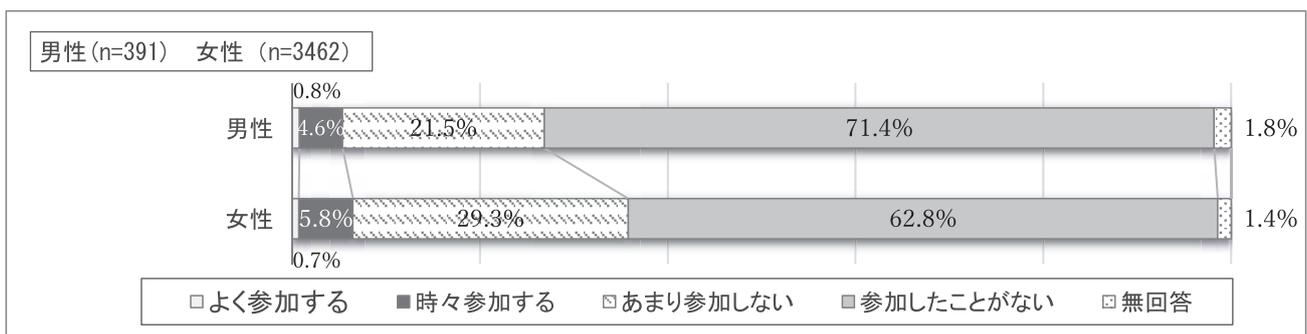
図表8 子育てについての相談相手（複数回答）



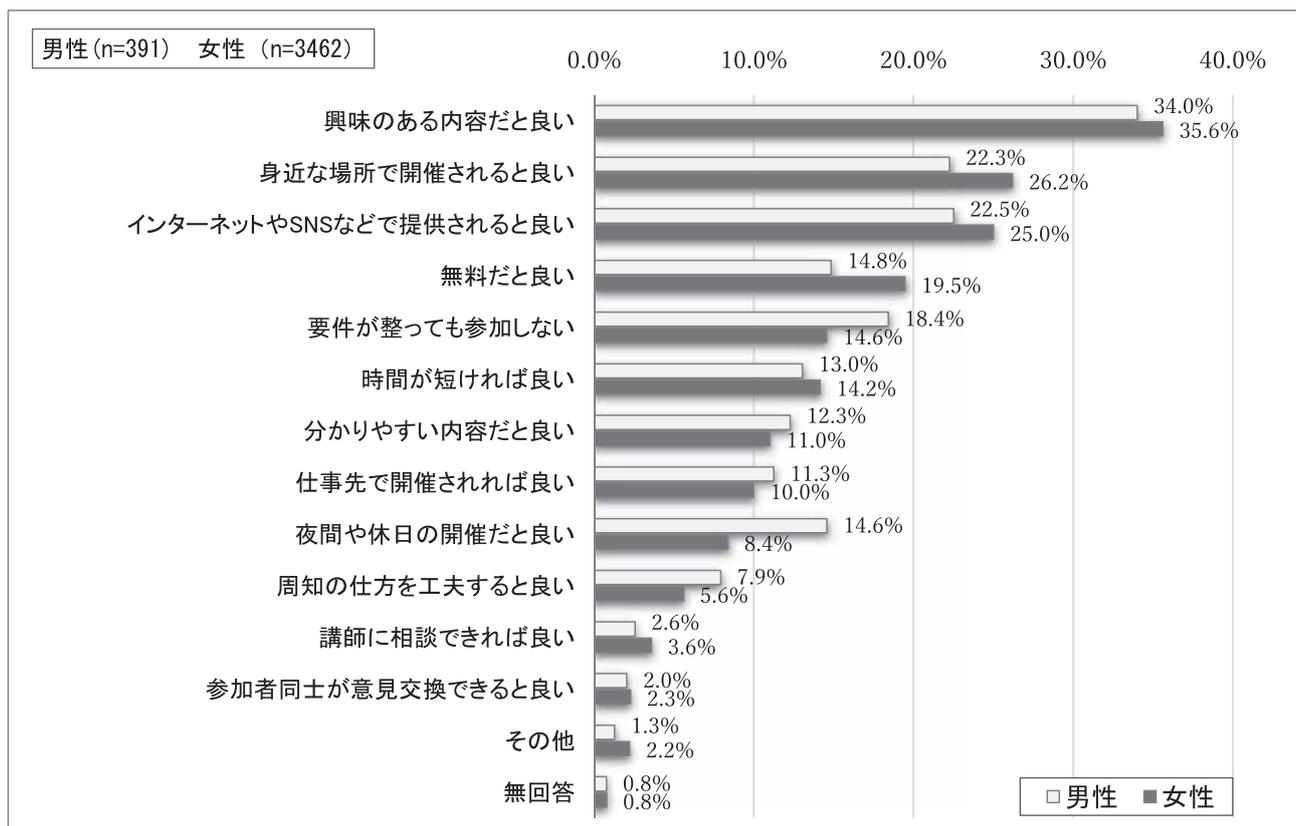
図表9 受けてみたい支援（複数回答）／性別



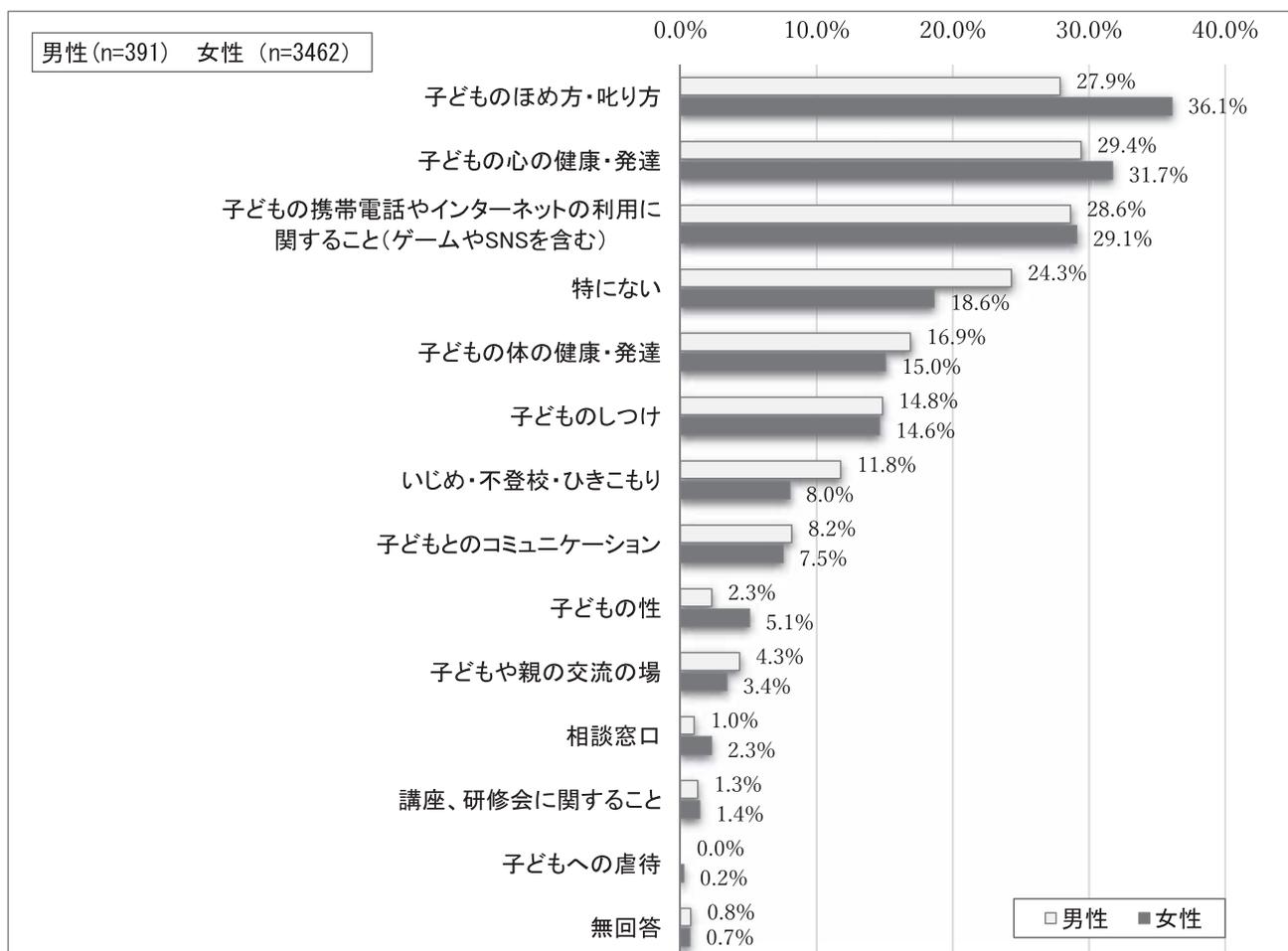
図表10 講座・研修会などへの参加状況／性別



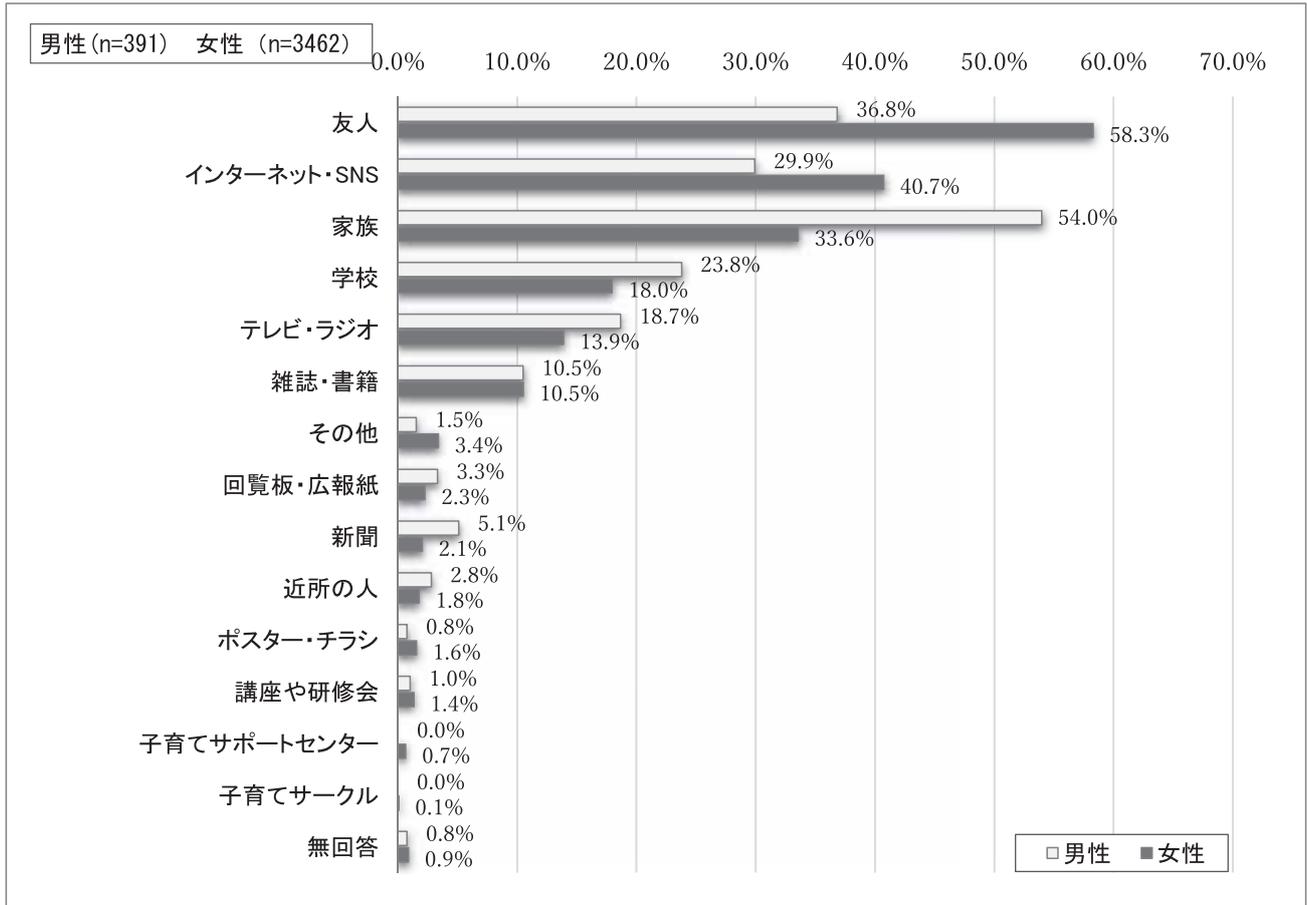
図表 1 1 講座・研修会などに参加しやすくするために重要なこと（複数回答）／性別



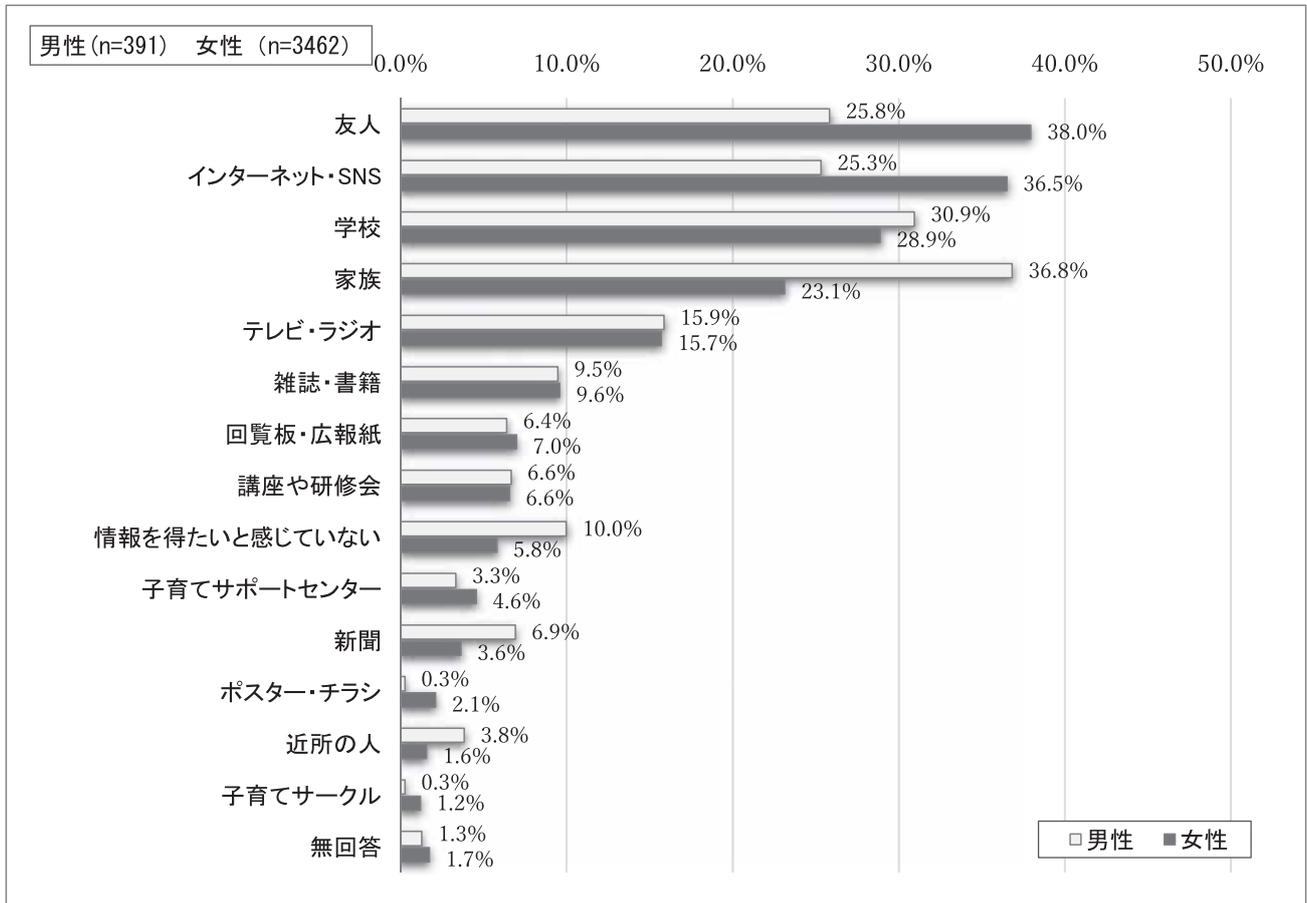
図表 1 2 家庭教育（子育て）について知りたい情報（複数回答）／性別



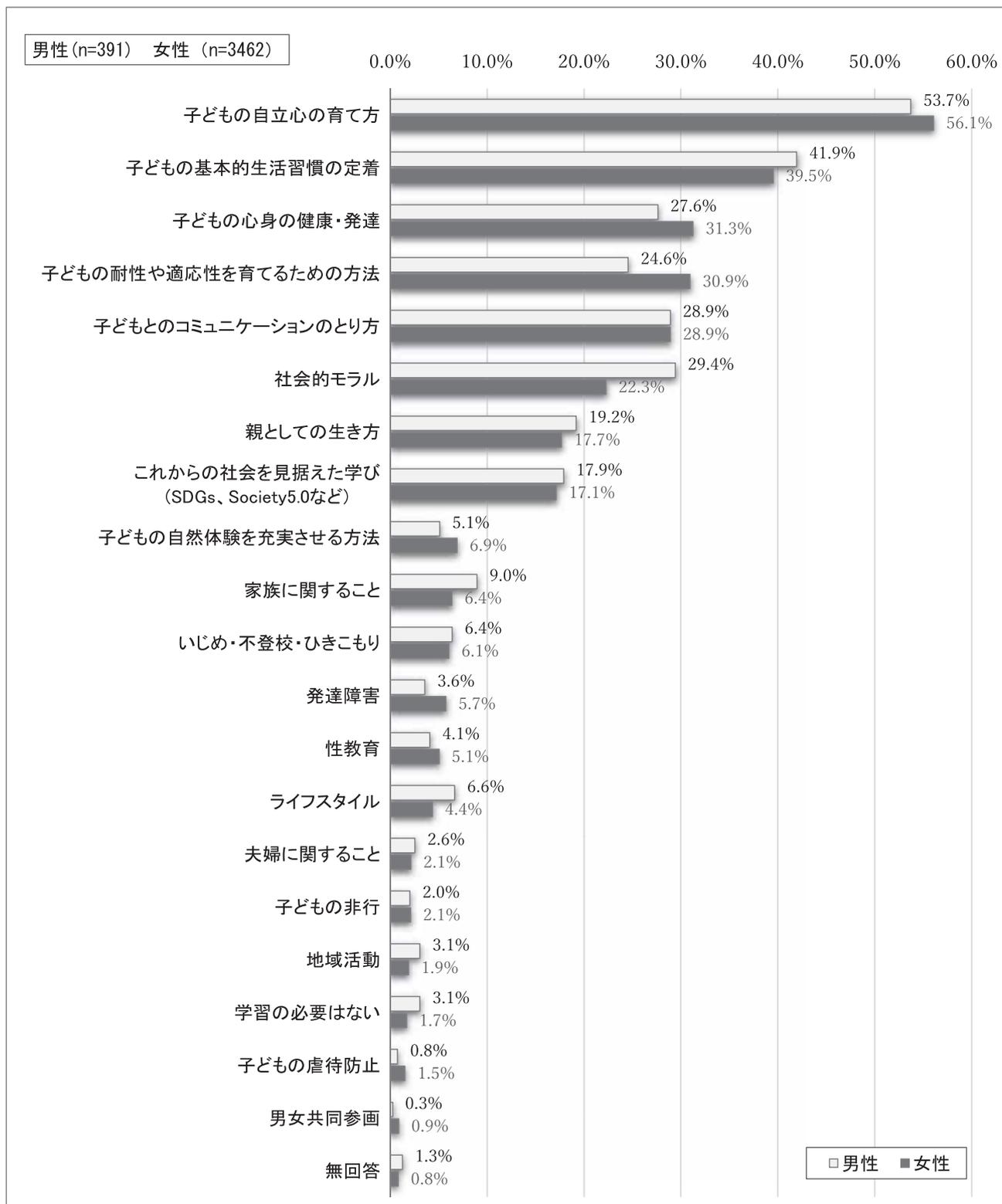
図表 1 3 家庭教育（子育て）に関する情報の入手先（複数回答）／性別



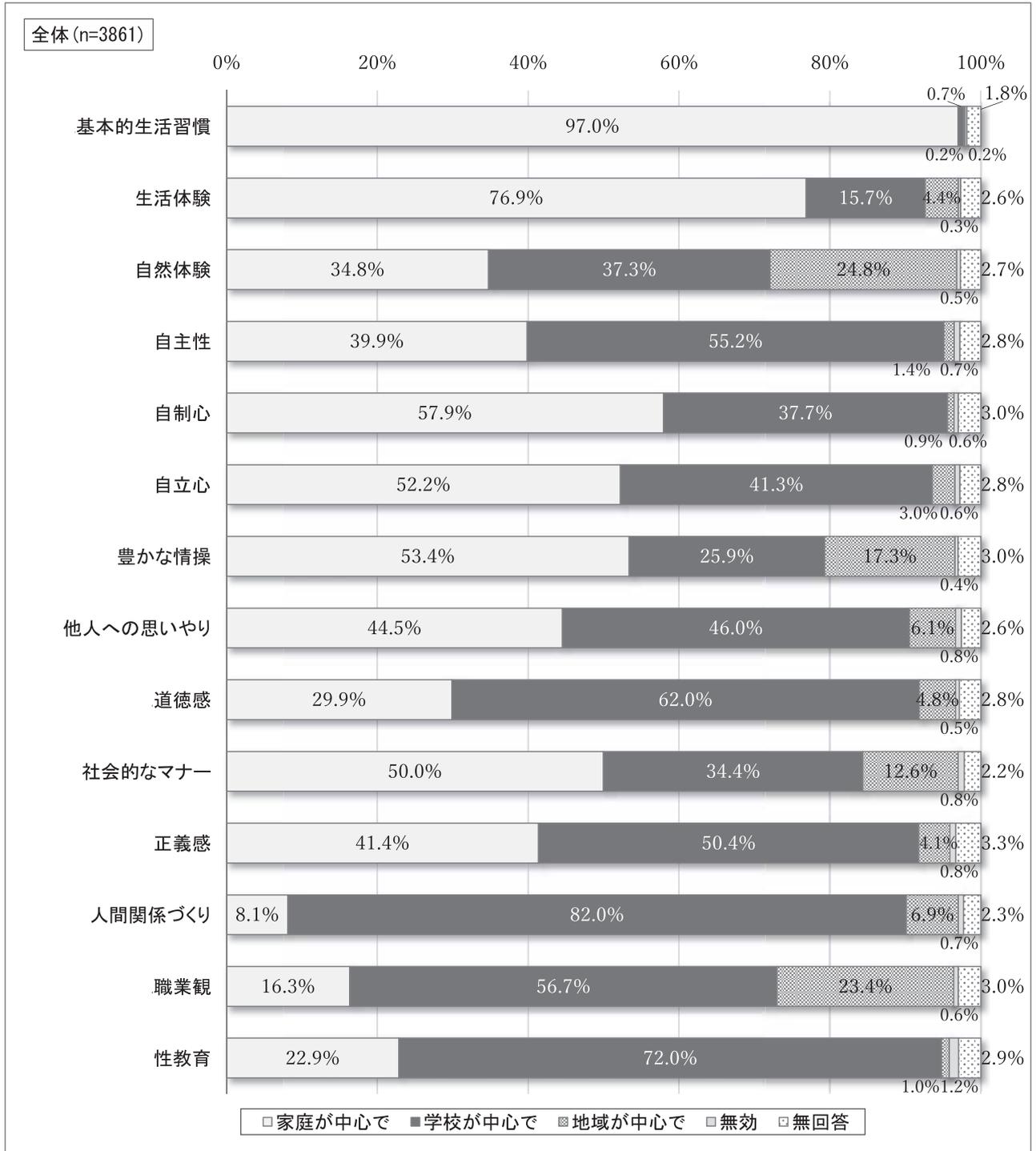
図表 1 4 家庭教育（子育て）に関する情報の希望する入手先（複数回答）／性別



図表 1 5 親の学習に特に大切だと思う内容（複数回答）／性別



図表 1 6 保護者が家庭・学校・地域に期待する教育機能



◆参考文献

家庭教育の充実のための実態等把握調査報告書 青森県教育委員会
 青森県親子等生活実態調査結果報告書 青森県
 青森県における新しい時代の生涯学習・社会教育の推進の在り方について（答申） 第15期青森県生涯学習審議会
 家庭教育連携・協働ハンドブック 青森県教育委員会
 子育てガイドブック～孫でマゴマゴしたときに読む本～ 岐阜県健康福祉部子育て支援課

◆本書は令和4年度青森県家庭教育支援推進協議会の意見を踏まえて作成されたものです。

令和4年度青森県家庭教育支援推進協議会委員

会長	平内町立小湊小学校 校長	菊池 信吾
副会長	青森明の星短期大学子ども福祉未来学科 准教授	高橋 多恵子
	弘前大学教育学部 講師	深作 拓郎
	青森県PTA連合会 理事・教育問題委員会副委員長	栩内 伸治
	青森県子ども家庭支援センター 部長	吉田 圭子
	今別町教育委員会 家庭教育支援コーディネーター	工藤 清子
	NPO法人子育て応援隊ココネットあおもり 代表	沼田 久美
	あおもり家庭教育アドバイザー	工藤 貴子
	青森県助産師会 理事	蛭名 えり子
	青森県総合社会教育センター家庭教育相談員	佐藤 麗子

（敬称略、順不同）

◆家庭教育支援に関する情報

○あおもり家庭教育支援総合事業に関する情報 https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-shogai/kateikyouikusien.html	
○家庭教育支援に係る刊行物 https://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kyoiku/e-shogai/kateikyouiku-kankoubutsu.html	
○総合社会教育センター主催の講座等 https://www.alis.pref.aomori.lg.jp 青森市荒川字藤戸119-7 017-739-1251	
○家庭教育情報・相談窓口 電話相談 017-739-0101 毎週月・水・木曜日 午後1時～午後3時（祝日、年末年始はお休み） メール相談 https://www.alis.pref.aomori.lg.jp/gakusyu/e-learning/kosodate-a/	すこやか ほっとライン 
○教育に関する相談窓口一覧 https://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/soudan.html	
○女性・子ども・教育に関する相談窓口一覧 https://www.pref.aomori.lg.jp/kenminno-koe/education_consultation.html	

改訂版ーみんなで家庭教育を支えるー
あおもりおやがく親楽プログラム～支援者編～

編集・発行

青森県教育庁生涯学習課

青森市長島一丁目1-1

017-734-9890

令和5年3月発行